

東日本大震災

踏み出そう!

子どもたちの笑顔のために

あすへ向けての軌跡

～震災から3年を経て～



国立大学法人
宮城教育大学

教育復興支援センター

東日本大震災

踏み出そう!

子どもたちの笑顔のために

あすへ向けての軌跡

震災から3年を経て

明日に向かって

教育復興支援センターの新しい展開



国立大学法人宮城教育大学長

見上 一幸

千年に一度といわれた東日本大震災から、早くも3年が過ぎました。

あらためて震災で亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、ご遺族や被災された方々の一刻も早い生活基盤の復興、心の傷の快復を願っております。

昨今の社会情勢の移り変わりはめまぐるしく、社会的関心は震災被害、被災地の復興からは薄れつつあるかのように思われます。

もちろん、被災地、宮城県の復興は十分とはいえず、むしろ、多岐にわたる深刻な課題が浮き彫りにされているように思います。例えば、小学校の低学年の児童にメンタルな面で震災の影響が顕在化しつつあり、宮城県教育委員会からも、その対応について協力を求められています。また、子どもたちが震災によってその「志」を諦めなければならないということは避けなければなりません。その意味で、キャリア教育推進の重要性を感じています。

宮城教育大学は、教育復興支援センターを中心に、教育復興に努力してまいりました。

その中でも特に、被災地の学校へ学生ボランティアを派遣する事業は、被災地からの感謝の声を待つまでもなく、本学、連携諸大学の学生の人間力の育成に大きな効果が出ているように思います。

被災地の教育復興の課題は短期間で解決されるものではなく、さまざまな過程を経て改善に向かうものと考えます。宮城教育大学は各教育委員会、学校、地域といっそう緊密に連携しながら、被災地の教育復興に向けて、学生の力を借りながら引き続き努力してまいります。

また、各教育委員会、学校、小中学校長会等のそれぞれ

の被災状況や、時々刻々の具体的な対応、復興に向けた実践について、数多くの報告書として刊行しました。これらは今しかできない、本学の社会貢献として後世まで残るものと考えます。

教育復興支援センターの平成25年度、この一年間の取組を振り返ると、いくつかの改善点が思い浮かびます。

一つは、組織としてセンター開設から約2年、研究開発の人的、物的充実を図ることができました。具体的には4月、当該部門を担当する研究職の教員を配置し、被災状況の把握、国内外の学会、大学と連携した取組を実施しており、それに基づいた研究開発部門から実践支援部門への成果の反映、学生への指導が期待されています。同時に、「環境・防災教育」を1年生の必修科目としてスタートさせました。受講後の提出レポート等によると、個々の学生の被災の実態、授業への意識、ボランティア活動への意欲等に大きな格差があると知ることができました。

二つには、25年6月、関係者の努力と国の支援により教育復興支援センター棟が竣工しました。センター棟は、鉄筋コンクリート2階建て、285平方メートルです。防災・復興教育等を担当する教員の研究室、会議室に加え、ボランティアに取り組む学生のミーティングルームも設けました。協力員を中心に学生の出入りも急増し、話し合いを通じてさまざまなアイデアが生まれ、多様な実践につながり、自覚と責任に目覚める学生が多くなったと聞き、喜ばしく思っています。

さて、いま、大震災から3年を経過し、4年目を迎えようとしています。

この3年間の宮城教育大学、教育復興支援センターの取組は、その設立目的に即して、その使命達成に向けて、教職

員、学生ボランティアにより大きな成果を上げてきました。それは、本「軌跡」や研究「紀要」、いま編集中の学生ボランティア活動の実際、「架け橋—私たちにできること」でも読み取ることでき、完成が心待ちされます。

一方、4年目を迎えるにあたり、あらためて本センターの使命、各種事業の見直しが必要です。いただいた提言を生かしながら、学問、研究の見地から、新たな活動の展開に取り組む必要があると考えています。

その内容を端的に示すと、平成26年1月発行したパンフレット、「踏みだそう!—子どもたちの笑顔のために」の構想図となりましょう。(p.4~5)

一例を挙げると、従来の研究開発・支援実践部門の往還による地域への貢献について基本は変わりませんが、新たな教育の創造、復興グローバル人材の育成、という点で具現化を図ることをねらっています。それらの取組によって、被災地を元気づけ、子どもたちが志を高く保ち、学生が人間力を身につけるという、よりダイナミックな展開、グローバルな貢献が可能となると考えます。

26年2月、文部科学省、OECDならびに本学の主催による「第16回 OECD/Japanセミナー」が、「キー・コンピテンシー／21世紀スキル」というタイトルの下に、仙台において開催されました。本学では長年、防災教育をESD、つまり、持続可能な開発のための教育の一環として実施してきました。そこで、「ESDとキー・コンピテンシー」と題して、本学から教育復興支援センターの実績も含めて報告したところ、参加者の多くの方々から防災教育の成果がOECDのいうキー・コンピテンシーの育成に通じ、また、21世紀スキルの育成にも効果的であるということにご理解をいただきました。

また、25年11月には、学生による自主企画「学び喫茶(復興カフェとの連携)」が開催されました。「フィリピン台風30号—私たちにできる恩返しを考えたい」とのテーマで、本学教員、フィリピンからの留学生による被害状況の報告、それを受けてフィリピンに対してどのような支援ができるかを考えるワークショップが開催されました。私もその企画を聞き、同日付で〈学長緊急メッセージ〉を寄せています。

この度の東日本大震災は千年に一度の大震災といわれていますが、あの阪神・淡路大震災から20年も経っていません。また、地域を特定せず地球全体に目を向けると、フィリピンの台風被害にかぎらず、ニュージーランド・クライストチャーチの地震、タイ・バンコクの洪水、インドネシア・スマトラ地震・津

波、中国・四川の地震など、記憶に新しいところです。

これを機に、宮城教育大学はこの度の震災を乗り越えて、グローバルな視点から貢献していかなければならないと考えます。すなわち、次の千年後の地震に備えるというより、世界中の人々とグローバルなネットワークをつくり、互いに互いを支援し、情報交換することによって、いつ起こるかも知れない災害を軽減することができると考えます。またその意味で、前述の学生企画はタイムリーな催しであったと敬意を表するものです。

平成27年3月、仙台市で第3回国連防災世界会議が開催されます。

その成功に向けて、主催側の一人、仙台市長から本学へ協力要請がありました。すでに一部では、市の国連防災世界会議担当課長が学生企画の被災地視察で南相馬市へ同行し、学生、留学生と交流を深めています。また、センター主催の「AERで学ぼう—宮教大防災Week」では講師として世界会議の概要、開催に向けたさまざまな課題、解決に向けた取組を説明いただくなど連携を深めています。

宮城教育大学における教育の将来構想を踏まえながら、教育復興支援センターの具体的な対応、サイドイベントの開催なども視野に入れ、協議していきます。

おわりになりますが、冒頭に提示したように被災地の復興、教育課題は山積し、本学、教育復興支援センター、学習ボランティア等の支援の要請は量的にも増え、心の問題、心のケアについて、その支援内容の専門性、深刻さも高まっています。

それに対応して、本学生の意欲、責任感にいつそう磨きをかけ、また、被災地における教育の復興、各方面との連携・協働を深めながら、「いま・ここに」において、使命、業務を再確認するとともに、次の5年、10年に目を向けて具体的な方向性を見出したいと考えています。



目次

踏み出そう！子どもたちの笑顔のために
あすへ向けての軌跡 震災から3年を経て

東日本大震災

明日に向かって
教育復興支援センターの新しい展開 国立大学法人宮城教育大学長 見上 一幸

I 教育復興支援センターの取組	01
1 平成 25 年度の活動	01
2 学生の自主的活動	03
II 支援実践部門	06
1 教育復興支援塾事業	07
2 教員補助事業	13
3 教員研修等事業	17
4 子ども対象・参加イベント事業	20
5 心のケア支援事業	22
6 こころざし・キャリア教育事業	23
III 研究開発部門	24
1 研究部門の充実	24
2 新たな教育の創造	29
IV 人材育成	34
1 学生ボランティア活動の実際	34
2 被災地視察研修	39

V 刊行物	40
1 教育復興実践事例集「明日の子どもたちのために」(第2集)	40
2 「被災から前進するために」(第2集)	40
3 学生ボランティア活動実践報告集「架け橋—私たちにできること」	41
4 教育復興支援センター「紀要」	41
VI 外部資金等の獲得	46
1 文部科学省大学改革推進等補助金	46
2 一般社団法人国立大学協会	47
3 被災地の教育復興支援事業「心に笑顔」プロジェクト	48
4 文部科学省「学びを通じた被災地の地域コミュニティ再生支援事業」	49
5 復興庁「新しい東北」先導モデル事業	49
6 公益財団法人上廣倫理財団	50
VII 資 料	51
1 平成25年度 教育復興支援センター活動(事業)実績一覧	51
2 教育復興支援センターだより	56

発刊にあたって 教育復興支援センター長 中井 滋



踏み出そう！子どもたちの笑顔のために

あすへ向けての軌跡 震災から3年を経て

I

教育復興支援センターの取組

I 平成 25 年度の活動

(1) 研究開発、新たな教育の創造

4月、研究開発部門担当の専任教員が配置された。それによって、支援実践部門との連携が図られ、学生のボランティアの活動の意義、防災教育の在り方等の理論的な研究が深められることになった。

また、被災地にある唯一の教育大学として、新たな分野への取組も始まっている。今年度から新規に取り組んだ学びを通じた被災地のコミュニティ再生支援事業、楽しみながら生きる力が身につく教育環境整備事業を展開している。

両事業を通じて、子どもたちの将来をどう築くのか、未来を切り開く人材をどう育てるのかなど、被災地の復興に寄与する教育大学として、新たな境地を開く取組となっている。

(2) 教育復興支援センター棟の竣工

教育復興支援センターが開設されて約2年、平成25年6月29日、教育復興支援センター棟の竣工式が開催され、供用が開始された。

竣工式では、文部科学省、大学関係者、宮城県及び仙台市教育委員会をはじめとした地域の教育委員会関係者ら約80名が出席し、子どもたちへの支援の充実を誓った。

式典では、見上学長の挨拶に続き、山下文科省文教施設企画部計画課長、高橋宮城県教委教育長、上田仙台市教委教育長からの祝辞があった。引き続き、佐藤施設課長からセンター棟の概要説明、中井教育復興支援センター長から今後の活動について報告があり、最後に学生代表による決意表明があった。

センター棟は鉄筋コンクリート2階建て、延べ床面積285㎡。学習支援ボランティアに取り組む学生のミーティングルームや防災教育等を担う教員の研究室、会議室等を備えている。

午後には、「学びの力が未来を拓く～宮城教育大学が地域のためにすべきこと～」をテーマとした竣工記念シンポジウムが仙台国際センターで開催



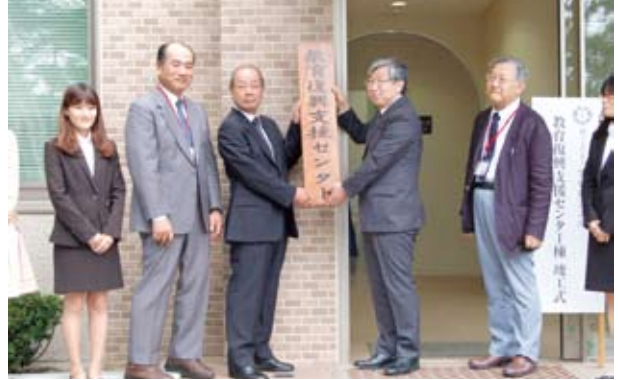
挨拶する見上学長



学生代表による決意表明

I 教育復興支援センターの取組

され、宮城教育大学の地域に根ざした復興支援や人材の育成について意見が交わされた。



センター看板の上掲

(3) 気仙沼 brunch の移転

平成 25 年 9 月 1 日、気仙沼市教育委員会の移転に伴い、気仙沼市・宮城教育大学連携センター（気仙沼 brunch）も移転し、活動を継続している。

気仙沼 brunch では、長期休業中の学習支援ボランティアの活動拠点となったり、被災地視察訪問では担当職員から気仙沼の被災状況や復興状況の説明を受けている。



2 学生の自主的活動

平成24年4月の入学生から、本センターと学生とを仲介するボランティア協力員を募り、活動を続けてきた。大学祭への企画・運営、被災地視察等を実施したが十分とはいえなかった。

しかし、平成25年度入学生オリエンテーションにおけるセンター長や協力員代表の呼びかけに応じて、4月の総会には1・2年生約100名が集まるとともに、運営委員として活躍したいと立候補する学生も数多く集まった。

その後、1・2年の運営委員の協議により、以下のとおり係分担が決められ、係ごとに原案が検討され、それに基づいて各種行事が企画運営された。

具体的には、不安解消会、視察報告会、ボランティア報告会、大学祭、海外交流、ホームページ制作、実態調査、掲示板、海外向け冊子制作の9チームである。



総会に集まった協力員



南相馬市ツアー

運営委員の企画で各行事等が実施されるとともに、学習支援ボランティアへの意欲的な参加が見られ、各教育委員会、各学校からの派遣要請に応えることができ、1年を通じて、協力員を中心とする学生の柔軟な発想、自主性・創造性を実感できた。

Let's move forward! 踏みだそう!



子どもたちの笑顔のために
for a smile on the faces of children

※東日本大震災で甚大な被害を被った教育の復興に向け、重点的に取り組む事項等を明確にし、児童生徒の確かな学力の定着・向上及び現職教員の支援を中長期的視点に立って実施します。
※自然災害のリスクを共有するアジア太平洋諸国との災害科学、災害復興、防災に関する知見を共有します。

*For recovery of education that suffered massive damage during the Great East Japan Earthquake, we have identified the priority matters to be addressed, and we extend support to teachers for securing stable academic development of children.

*We are also engaged in sharing knowledge and insight concerning disaster science, restoration, and disaster risk reduction with various Asia Pacific regions that are prone to the risk of natural disasters.

○ 宮城教育大学教育復興支援センターの取り組み

Initiatives taken by Center for Disaster Education & Recovery Assistance, Miyagi University of Education

学力の定着・向上

Academic assurance and development

被災地域児童生徒の学力の定着を目指す。

We aim to stabilize the academic development of children and students residing in disaster-hit areas.

教育復興人材の育成

Development of leaders for recovery of education

下記活動を通じて、将来教育分野での復興を担う人材の育成に寄与する。

Through the following activities, we contribute to the development of leaders who would play important roles in the recovery of education in the future.

- 児童生徒の学習支援・教員の補助
- 地域との協働事業補助
- 被災地視察研修・講習会・ボランティア活動実態調査
- 他大学との交流
- Learning assistance to children and students, support to teachers
- Support for collaborative programs in the community
- Disaster site visits and training, lecture sessions, survey of actual volunteer activities
- Exchange with other universities

関係機関との連携・協働

Cooperation and collaboration with the relevant institutions

宮城県内の教育委員会、宮城県内の国公立大学、全国の国立教員養成系大学・学部などと協働する。

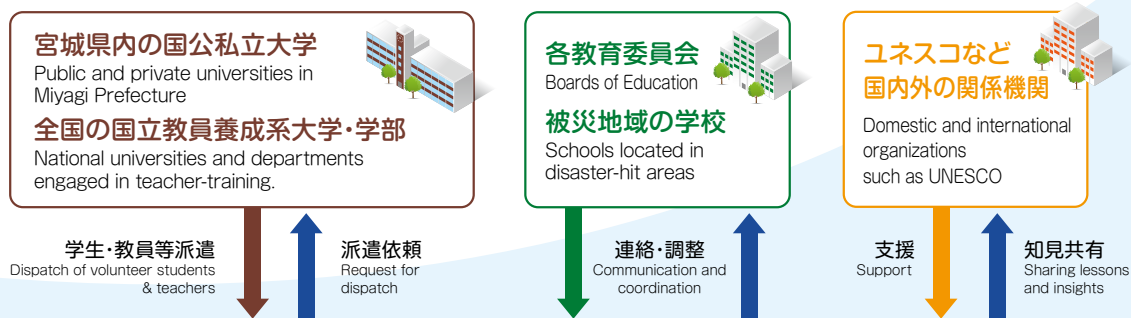
We cooperate with Boards of Education in Miyagi Prefecture, public and private universities in Miyagi Prefecture, and national universities and departments engaged in teacher-training nationwide.

防災・復興の情報発信

Disseminating lessons about disaster prevention and restoration

災害科学、災害復興、防災に関する知見を国内外に広く発信する。

We disseminate lessons and knowledge concerning disaster science, disaster restoration, and disaster risk reduction domestically and globally.



宮城教育大学 教育復興支援センター

Miyagi University of Education Center for Disaster Education & Recovery Assistance

研究開発部門

Research and Development Division


↻

支援実践部門

Practical Support Division

- 被災地における現在進行形の教育復興支援ニーズの把握
- 支援の最適化、支援実践
- 東日本大震災からの教訓と知見の蓄積
- 国内外の他機関との連携～グローバルな知見共有～被災地間協働
- 防災教育プログラムの再検討・教材作成
- 震災を踏まえた新たなコミュニティ防災の「場」創出の実証・実践

- ・ Understanding the current needs of recovery of education in disaster-hit areas
- ・ Optimization of support, offering practical support
- ・ Accumulating lessons learned and insights gained from the Great East Japan Earthquake
- ・ Collaboration with other domestic and international institutions
-Global knowledge-sharing-Cooperation between disaster-hit areas
- ・ Review of disaster risk reduction education programs and development of teaching materials
- ・ Demonstration and practice of creating new “Avenues” for community disaster prevention in light of the earthquake disaster



地域への貢献

Contributing to local community

- ◎ 被災地への学習支援事業
Learning assistance in the disaster-hit schools
- ◎ 子どもをとりまく地域再生支援事業
Projects for revitalizing the local community involving children

新たな教育の創造

Innovation in Education

- ◎ 防災教育・復興教育の創造
Creating new education in disaster preparedness and recovery
- ◎ キャリア教育の開発と充実
Developing and innovating career education
- ◎ 時代の要請に応える教育
Education meeting the current needs

復興グローバル人材の育成

Global Human Resource Development for Disaster Recovery

- ◎ 東南アジア地域との連携
Collaboration with Southeast Asian countries
- ◎ 海外関係機関との協力関係
Cooperation with institutions abroad

支援プログラム

Support Programs

1. 教育復興支援塾事業 Project of support classes for recovery of education
2. 教員補助事業 Project for supporting teachers
3. 教員研修等事業 Teacher training project
4. 子ども対象・参加イベント事業 Project of participative events for children
5. 心のケア支援事業 Psychological care and support project
6. こころざし・キャリア教育事業 Career and education support project



踏み出そう！子どもたちの笑顔のために

あすへ向けての軌跡 震災から3年を経て

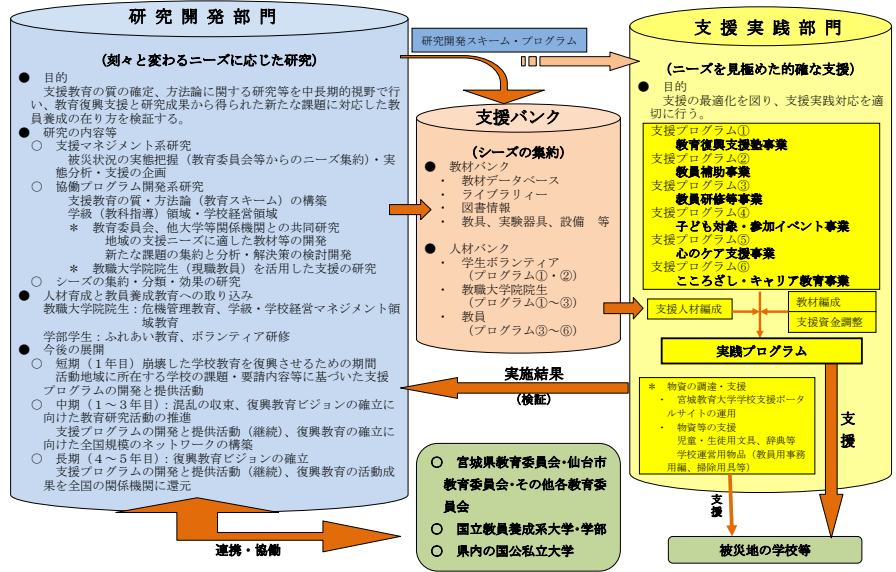
II

支援実践部門

本センターの目的は、宮城県の教育の復興に向け、地域自治体の復興施策内容を念頭に、重点的に取り組む事項等を明確にし、中・長期的に立って児童・生徒の心のケアや確かな学力の定着・向上および現職教員の支援を実施することとしている。

支援プログラムの中では、①教育復興支援塾事業、②教員補助事業を中心に、各学校等へ学生ボランティアの派遣を行っており、支援される児童生徒、支援する学生ともに成長している。

支援実践部門



支援プログラム①

教育復興支援塾事業

長期休業期間、土日を利用した、補習事業

支援プログラム②

教員補助事業

授業中の T2（教員補助）の役割
授業間及び放課後の園児、児童、生徒の相手
放課後塾の支援 課外活動支援

支援プログラム③

教員研修等事業

防災教育、教育臨床支援、カリキュラム開発、等
セミナー、講演会、研修会の開催等

支援プログラム④

子ども対象・参加イベント事業

通常授業の中へイベント的要素の提供
(大学教員による実験工作教室、学生によるミニコンサート等)

支援プログラム⑤

心のケア支援事業

教員への支援（講習会や説明会実施）
児童生徒への支援（個別相談）

支援プログラム⑥

こころざし・キャリア教育事業

(先輩や著名人による児童・生徒対象講話)

支援実績の検証等を踏まえ、ニーズに応じた最適な実践プログラムで県内の国公立大学や全国の教員養成系大学・学部と連携・協働しながら支援を実施

1 教育復興支援塾事業

日程	実施場所・学校名等	実施内容	派遣実人数	延人数 (参加人数)
7/22～26	女川町立女川小学校	自学自習支援	4	8
7/22～8/23	柴田町内4小・中学校	自学自習支援	5	17
7/25～8/20	大河原町立大河原中学校	自学自習支援(数学・英語)	2	7
7/25～8/6	仙台市立七郷中学校	自学自習支援(5教科・主に中3年生)	10	10
7/30～8/5	亶理町立逢隈中・荒浜中学校	自学自習支援(数学・英語、中3年生対象)	8	11
8/5～9	角田市内3小・中学校	自学自習支援	10	29
8/5～9	大崎市内3小・中学校	自学自習支援(小5・6年生及び中1～3年生対象)	17	67
8/5～9	気仙沼市内8中学校	自学自習支援(小3～6年生及び中1～3年生対象)	21	89
8/5～9	大和町立大和中学校	自学自習支援(数学・英語、中1～3年生対象)	2	10
8/5～9	大和町立宮床中学校	自学自習支援(数学・英語、中1～3年生対象)	3	11
8/5～9	登米市立南方中学校	自学自習支援(主に中3対象)	11	52
8/5～9	丸森町立丸森中学校	自学自習支援(5教科・中1～3年生対象)	9	44
8/5～9	名取市立関上中学校	自学自習支援(5教科・中1～3年生対象)	16	58
8/5～9	登米市内小・中学校	自学自習支援(小3～6年生及び中1～3年生)	8	40
8/5～9	色麻町立色麻小学校①	自学自習支援(小3～6年生対象)	2	10
8/6～7	登米市立米山中学校	自学自習支援(数学・英語、中1～3年生対象)	5	10
8/6～9	仙台市立蒲町中学校①	自学自習支援(数学・英語、主に3年生対象)	3	7
8/7～9	石巻市内小・中学校	自学自習支援(小3～6年生及び中1～3年生)	1	3
8/7～11	美里町立小牛田中学校	自学自習支援(小3～6年生及び中1～3年生)	3	5
8/7～9	一関市立萩荘中学校	自学自習支援(数学・英語・国語)	2	6
8/8～12	美里町立不動堂中学校	自学自習支援(小3～6年生及び中1～3年生)	3	4
8/10～12	明成高校	学習支援(小論文・英語・数学)	3	5
8/16～20	栗原市築館中学校	「学府くりはら塾での講師」(教材作成・指導を含む)	19	73
8/19～21	仙台市立蒲町中学校②	自学自習支援(数学・英語、主に3年生対象)	8	21
8/19～22	南三陸町立戸倉小学校	自学自習支援(全学年)	9	32
8/19～22	黒川高校	サマースクール講師(国語・数学・英語、主に2年生)	2	8
8/19～23	色麻町立色麻小学校②	自学自習支援(小3～6年生対象)	9	21
8/19～23	色麻町立色麻中学校	自学自習支援(中1～3年生対象)	9	21
8/19～23	大郷町立大郷小・中学校	サマースクール講師・自学自習支援	12	40
8/19～23	女川町立女川中学校	自学自習支援(中1～3年生対象)	7	31
8/19～23	塩釜市内4中学校	自学自習支援(中1～3年生対象)	14	57
8/20～22	岩沼市中央公民館	自学自習支援(仮設に入居している児童、生徒対象)	4	11
8/20～22	岩沼市立玉浦小学校	自学自習支援	7	19
8/21～23	栗原市金成庁舎	小学校版「学府くりはら塾」・自学自習支援(小3～6年生対象)	12	31
12/22～23	蔵王町ございんホール	蔵王町冬の学習会(自学自習支援、数学・英語、中1～中3対象)	1	2
12/23～25	栗原市金成庁舎	「冬の学府くりはら塾」での講師(中3対象・教材作成・指導を含む)	6	10
12/24～26	塩釜市内2小学校	自学自習支援(国語・算数・数学、小3～6年生及び中1～中3対象)	3	6
12/25～26	大和町大和中学校	自学自習支援(数学・英語、中1～3年生対象)	2	4
12/25～26	大和町宮床中学校	自学自習支援(数学・英語、中1～3年生対象)	5	7
12/25～27	気仙沼市内7中学校	自学自習支援(小3～6年生及び中1～3年生対象)	16	46
12/25～27	仙台市立蒲町中学校	自学自習支援(主に数学・英語、中1～中3対象)	5	12
12/25～27	亶理町立吉田中学校①	自学自習支援(主に数学・英語、中1～中3対象)	3	6
12/25～27	大郷小学校	自学自習支援(国語・算数、小4～小6対象)	8	12
12/25～27	大崎市内3中学校	自学自習支援(中学生対象)	9	17
12/26～27	登米市立南方中学校	自学自習支援(全教科)	3	6
12/26～27	栗原市金成庁舎・文化会館	小学校版「学府くりはら塾」での講師(小3～6年生対象)	8	15
12/27	美里町北浦コミュニティセンター	自学自習支援(北浦小学校生対象)	2	2
1/18～19	柴田町立船岡公民館	市内3中学校自主学习支援	4	7
3/25～28	気仙沼市内6中学校	自学自習支援(小3～6年生及び中1～2年生対象)	12	48

① 学府くりはら塾

《夏休み学習会》

- ①実施期間 中学生の部 8月16日(金)～20日(火) 5日間
小学生の部 8月21日(水)～23日(金) 3日間
- ②実施会場 中学生の部：築館中学校
小学生の部：栗原市役所金成庁舎
- ③参加学生 31名

《冬休み学習会》

- ①実施期間 中学生の部 12月23日(月)～25日(水) 3日間
小学生の部 12月26日(木)～27日(金) 2日間
- ②実施会場 中学生の部：栗原市役所金成庁舎
小学生の部：栗原文化会館・栗原市役所金成庁舎
- ③参加学生 14名

＝支援内容＝

中学生に対しては、既習事項を基に、学生が事前に作成した問題による個別指導や一斉指導を展開し、生徒の苦手意識や課題克服をめざした。

小学生に対しては、学校から出された長期休業の課題や、教育委員会で準備した問題に取り組む過程での個別支援を行った。

＝成 果＝

中学生に対しては、学生が作成した問題の内容や、それに基づく一斉指導に対する不安もあったが、生徒の反応も良好で概ねの成果は得られたものとする。

また、小学生においても、個別指導が中心のために日を追うごとに児童との信頼が強くなり、自ら手を挙げて質問するような光景も見られ、充実した学習会となった。



中学生を対象にした授業風景



小学生を対象にした学習支援風景

② 気仙沼市学び教室

《夏休み学び教室》

- ①実施期間 8月5日（月）～9日（金） 5日間
- ②実施会場 気仙沼中学校 鹿折中学校 松岩中学校 階上中学校
面瀬中学校 大島中学校 小原木中学校 津谷中学校（8会場）
- ③参加学生 16名

《冬休み学び教室》

- ①実施期間 12月25日（水）～27日（金） 3日間
- ②実施会場 気仙沼中学校 鹿折中学校 松岩中学校 階上中学校
面瀬中学校 大島中学校 津谷中学校（7会場）
- ③参加学生 16名

＝支援内容＝

午前中は小学生、午後は中学生を対象にした学習支援活動となった。支援内容は、子どもたちの自学自習に対する個別支援が中心となったが、会場によっては学生が作成した問題に取り組む機会も設けた。

多くの児童生徒が被災している地域だけに、対応については毎日宿泊施設でミーティングを行い、細心の注意をはらうことに心がけて臨んだ。

＝成果＝

自学自習への支援のために個別指導が中心となった。そのため、日が経つにつれて互いに慣れ親しみ和やかな雰囲気の中で学習会が進められた。小学生、中学生とも各自が準備した学習課題について、概ね終えることができた。



フェリーに乗って大島中学校へ



毎夜行われた情報交換会

③ 名取市立閑上中学校夏休み学習会

- ①実施期間 8月5日(月)～9日(金)5日間
8:30～11:30、13:00～15:45
- ②実施会場 閑上中学校仮設校舎
- ③参加学生 早稲田大学(5)、仙台大学(3)、本学(8) 合計16人
- ④対 象 閑上中学校1、2、3年生の希望者

=支援内容=

1、2年生は1学期の学習帳、3年生は高校受験に向けた問題集などの解説や質問に答える形式の学習支援内容であった。

=成 果=

3つの大学の学生が集まって行われた学習支援だったが、学生同士が互いに自己紹介や参加への思いを話し合うなどの交流が行われ、生徒への指導にも連携が図られた。また、閑上中学校は津波により大きな被害を受けたことや、その後の仮設校舎での学習などの説明を受けたことで、より積極的な指導が行われた。



個別にじっくりと



集中した学習風景



学生間の交流



被災地(閑上中学校)研修

④ 登米市立南方中学校(登米市教育委員会)

今年度、登米市教育委員会は、学び支援を実施することになった。

支援要請を受け大阪教育大生を派遣することになったが、登米市は広く、宿泊先の迫町佐沼から遠く離れている会場も多く移動も大変で、小規模な学習会が多かった。

それぞれ地元の学校の意向もあり、内容にも違いがあったが熱心に取り組んでいた。市教委の配慮により、明治初期の建物が現存する登米小学校などの歴史的建造物を案内していただいた。

南方中学校は、市教委に先立ち学校独自の学習会を実施している。1週5日間、希望制ではあるがほとんどの中学生が参加している。暑い夏は学校を離れ、近くの公民館、改善センターなど冷房の効いた快適な環境の中で学習に励んでいた。

前年の夏以来、京都教育大生（一部本学生も含む）を派遣してきた。南方中学校生徒と学生との一体感は深く、閉講式には双方とも、別れを惜しんで涙を流す場面が毎回見られた。

京都から2年連続で訪れたり、卒業式参加のために自費で中学校を訪れる学生がいたりするなど、予想を上回る人間的な結びつきを見せている。

そうしたことも、南方中学校の教職員が手分けして問題集を準備し、学生とともに指導にあたっている点大きい。学生の学習支援の効果もあってか、高校入試等の結果、内容がよかったと報告を受けている。最も効果的な支援が実施されている学校の一つといってよいだろう。

なお、冬は3年生の受験対策学習会であったが、公立、私立の高校入試問題で、その場で問題に答えるのは難しい場面が多く見受けられた。



最後に、南方中学校の吉野校長先生からの礼状を紹介する（センター長あて）。

御 礼

師走を迎え、貴職には益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。

さて、本校の長期休業中の「学習会」の実施にあたり、学習支援ボランティアを派遣していただき、衷心より感謝いたしております。貴センターのお取り計らいによりこれまで来校していただいた宮城教育大学、京都教育大学、北海道教育大学、東北学院大学の学生ボランティア諸兄の誠意溢れる支援は学習支援活動という領域に止まらず、本校生徒にとって「将来」「生き方」ということについて考える貴重な機会となっています。

本学習会の事後評価については、事業実施報告書でご覧いただいておりますが、生徒は本学習会への参加により、震災以来、困難さが増した学習環境の下であっても、学習への意欲及び進路実現への決意を強くすることができております。これも偏に、学習ボラン

II 支援実践部門

ティア派遣にご協力いただいた貴職の指導・支援の賜と存じます。

また、生徒にとっては学習ボランティアの学生諸兄との学習以外での交流も、自身の将来を見据えた際に、よい機会となっております。例えば、これまでは漫然と「教員になりたい」という夢はあっても、具体的な進路設計のなかった生徒が「佐沼高校から宮城教育大学で学び教師になりたい」と話すようになったということです。本校では、キャリア教育の一環として「先輩に聞く会」や「職業人に聞く会」などの啓発的体験活動を実施しておりますが、今回の学習会での学生諸兄との出会いは、これらの行事と同様の効果を生徒に与えたものと思います。

震災から千日が経過しましたが、いまだに2600名を超える人々が家族の元に帰れないままになっております。震災の被害は可視化できるものとそうでないものがあります。被害の程度は異なっていますが、有史以来と言っても過言ではない大震災を経験し、家庭や将来への不安をもつ生徒は沿岸・内陸の別なくいる状況です。貴職にはこのような現状を勘案していただき、今後ともご支援を賜りますこともお願い申し上げます、御礼とさせていただきます。

平成 25 年 12 月 6 日

登米市立南方中学校長 吉野 幸信

□ 平成25年度 教育復興支援ボランティア協力大学

	大学名	支援先	実人数	延人数
1	北海道教育大学	丸森中学校	2	9
		玉浦小学校	3	9
2	東京学芸大学	塩釜市内中学校	9	45
3	上越教育大学	志津川中学校	3	15
4	愛知教育大学	大崎市内3小中学校	7	35
		志津川中学校（夏期）	7	35
		志津川中学校（春期）	5	25
5	大阪教育大学	登米市内小中学校	8	40
6	京都教育大学	南方中学校	9	45
7	奈良教育大学	丸森中学校	4	20
		丸森町内小中学校	11	44
		気仙沼市内6中学校（春期）	5	20
8	福岡教育大学	女川中学校	5	25
9	群馬大学教育学部	角田市内3小・中学校	1	5
10	仙台大学	閑上中学校	3	10
11	東北大学	女川小学校	1	3
12	東北学院大学	蒲町中学校	3	9
		気仙沼市内小中学校（冬期）	4	12
		戸倉小学校	1	3
		北上小学校	5	11
13	早稲田大学	気仙沼市内小中学校（夏期）	5	25
		閑上中学校	5	25
		気仙沼市内小中学校（冬期）	5	15
14	徳島大学	気仙沼市内小中学校	2	6

2 教員補助事業

日程	実施場所	実施内容	派遣実人数	延人数 (参加人数)
4月～継続(年間)	仙台市立中野小学校	教員補助	26	
4月～継続(年間)	仙台市立荒浜小学校	教員補助※仮設住宅での学習支援を含む	2	
4月～継続(年間)	岩沼市立玉浦小学校	教員補助	1	
4月～継続(年間)	仙台市立七郷中学校	教員補助	1	
10月～継続(年間)	明成高校	教員補助	1	
12月～3月	仙台市立蒲町中学校	教員補助(放課後学習支援)	1	1
5月22日	宮城県立石巻支援学校	運動会の準備・運営補助、児童生徒への活動補助	1	1
5月22日	仙台市立荒浜小学校	運動会の準備・運営補助、児童生徒への活動補助	20	20
6月15日	岩沼市陸上競技場	岩沼市中総体(陸上競技)の実施・運営の補助	8	8
8/19～21	石巻市立北上小学校	図書整理	5	14
8/19～23	南三陸町立志津川中学校	自学自習支援・部活動支援	15	74
9/11～14	福島県会津若松市 (大熊幼稚園、大熊小・中学校)	教員補助	23	92
9/24～27	丸森町内5小学校	教員補助	20	77
10月5日	石巻市立北上小学校	図書整理	5	5
11月2日	宮城県石巻支援学校	学校祭の準備・運営補助、児童生徒への活動補助	7	7
11/19、22	七ヶ浜町中央公民館	七ヶ浜町内小・中学校の不登校支援	2	2
2/16～21	福島県会津若松市 (大熊幼稚園、大熊小・中学校)	教員補助	25	125
3月22日	仙台市立荒浜小学校	卒業式運営補助	4	4
3/24～28	南三陸町立志津川中学校	自学自習支援・部活動支援・環境整備	12	60

① 仙台市立荒浜小学校

荒浜小学校は、現在、同じ宮城野区内の東宮城野小学校の校舎を借りて教育活動を行っている。

今年は2名の学生が、授業中の学習支援や放課後の遊び相手として継続的に教員補助を務めている。また、毎年6月に行われる運動会には、今年も20名の学生が準備や後片づけ、会の運営、また演技種目への参加などの支援にあたっている。



② 仙台市立中野小学校

中野小学校は、現在、同じ宮城野区の中野栄小学校の校舎を借りて教育活動を行っている。当校へは、発災の年の5月から継続的に学校支援にあたってきている。本年も、時には20名を越える学生がそれぞれに曜日を分担して、学習支援や放課後支援の教員補助を務めている。

II 支援実践部門

主な活動内容は、以下のとおりである

- ・ 学習支援：授業中の教員補助、子どもたちの学習サポート
- ・ 杉の子寺子屋：放課後を利用した「遊び塾」と「学び塾」の企画運営。スクールバス出発時刻の変更を願い出て、年数回「紙飛行機飛ばし大会」などのイベントも開催している。
- ・ 行事の補助：運動会、学習発表会、遠足などの運営の補助に携わっている。当日だけに限らず、準備や事前指導の段階から関わっている。



③ 丸森町立丸森小学校 ほか

丸森小学校、小斎小学校など丸森町内の5つの小学校において、学校で計画する授業への支援を行う教員補助者派遣事業が行われた。9月24日（火）から27日（金）まで4日間、奈良教育大と本学の学生20人が宿舎のあぶくま荘から各小学校に分かれ、9時過ぎから15時30分ごろまで、学習支援や放課後の児童の遊び相手などの教員補助を務めた。

授業時間でのかかわり以外に図書整理や合同防災訓練、業間や放課後に一緒に遊ぶなどの活動をした。



真剣に取り組んでいます



枝まめがいっぱいとれたよ



指づかいはこうして・・・



構図がいいね

④ 岩沼市立玉浦小学校

本学の学生が被災を受けた母校に対して、長期休業中の学習支援だけでなく、平日の授業に参画し支援している姿が見られた。玉浦小学校において、平成25年1月から毎週金曜日、教員補助のボランティアとして、主に2年生の学級を中心に学習補助を行い、給食や休み時間も一緒に過ごした。継続していることで、子どもたちとも仲良くなり、今では学生の来校を持ち望んでいる。



しっかり読めてるね



よういどん

⑤ 石巻支援学校(学校行事)

体育祭 5月27日 教員補助(運動会の運営補助、児童生徒の活動補助)

学校祭 11月2日 学校祭の運営等(会場準備係、受付、会場、児童生徒の管理等)

石巻支援学校へは震災直後から、本学特別支援教育専攻の学生が中心となって、3人1チーム、2泊3日の日程で避難所の運営補助(清掃、炊飯、児童生徒との遊び等)にあたった。

その縁で、現在は学校行事の支援を行っている。本学の学生以外でも、当校で教育実習や介護体験実習を経験した地元出身者の東北福祉大、石巻専修大、宮城学院女子大の学生も参加している。



⑥ 石巻市立北上小学校(図書整理)

前年度の東松島市図書館（各小中学校会場）、気仙沼向洋高（仮設校舎）での図書整理に続き、今年度は北上小学校で実施された。北上小学校は、平成 25 年 4 月、相川小、橋浦小、吉浜小の 3 校が統合した学校である。

昨年、東松島市図書館から依頼を受けて、小野小や鳴瀬二中を訪れた際、全国図書館協議会東日本大震災対策委員会の方々と知り合い、そこでの情報交換が縁で、今年の活動につながっている。

第 1 期 8 月 19 日～ 22 日 第 2 期 10 月 5 日

本学生以外では、東北福祉大、奥州大の司書資格取得をめざす学生が参加している。

北上小は「日本一楽しい学校図書室」をめざし、数多くの作品を出している 6 人の絵本作家が訪れ、図書室の壁や柱に自作の主人公などを描画していた。



3 教員研修等事業

日程	実施場所	実施内容	参加人数
6月29日	仙台国際センター	教育復興支援センター棟竣工記念シンポジウム 「学びの力が未来を拓く」	110名
7月22日	美里町 駅東地域交流センター	美里町学び支援事業研修会「子どもと向き合うための学び相談員・支援員としての心構え」	20名
11月26日	仙台市立寺岡小学校	公開研究会コーディネーター	350名
12月8日	仙台情報・産業プラザ (AER)	南東北3大学連携「災害復興学」市民講座「東北の未来創りと大学の使命」	80名
12月24日	大郷町立大郷小学校	講演会「震災の影響が懸念される児童・生徒を考慮した授業づくり」	42名
2月1日	仙台市青葉体育館	国際教育シンポジウム2014「国際教育から見える地域コミュニティ～震災後の東北から～」	72名

1 美里町学び支援事業研修会

夏休みに入った7月22日（月）、美里町教育委員会主催の上記の研修会が行われ、「子どもと向き合うための学び相談員・支援員としての心構え」と題して、本センター教員が講師を務めた。

美里町は内陸部に位置し、震災被害を目で確認することはできないものの、数は少ないが被災地からの転入生もあり、指導にあたってきめ細かな対応を心がけたいとの思いからテーマが決定されたものである。美里町へは24年夏から本学学生、県内他大学生が自学自習の支援にあたってきている。

講演では、宮城教育大学教育復興支援センターの取組、学生ボランティアの活動の概況を報告した。また、今年度からの新科目「環境・防災教育」を受講する学生の感想に触れ、震災復興に役立ちたいという決意や真摯な思いを紹介した。その一方で、震災により被災した児童生徒とどのようにリレーションをつくるか、はじめの一声をどうかけたらよいかわからないとの悩みが多いことも紹介した。

それに対する対応が講義及び研修会の結論であり、教師の基本的態度であるカウンセリング・マインドをもって接すること、具体的には傾聴、共感的理解、受容的態度の必要性を説いたものである。

ただし、本研修会の受講生である支援員のほとんどは教員経験者であることから、むしろ一緒に児童生徒の支援にあたる本学学生、他大学生への指導をお願いすることが中心となった。

2 南東北3大学連携シンポジウム宮城大会

12月8日（日）、仙台情報・産業プラザ（AER）にて標記のシンポジウムが開催された。

はじめに、結城山形大学長による「ソフトパワー大国をめざして——東北からの発信の可能性」と題した基調講演があった。引き続き行われたパネルディスカッションでは、「東北の未来創りと大学の使命」をテーマに、起業家、ジャーナリスト、NPO法人代表に加え、3大学の関係者がパネリストとなり、それぞれの重点的取組の紹介、多様な視点からの大学への提言がなされた。

南東北3大学——山形大学、福島大学、宮城教育大学の3国立大学は、東日本大震災後、教育の活性化を図るために連携を深めてきた。そして毎年、山形、福島、宮城の各会場で、一般に公開して開催している。

昨年、各会場で発表されたものを中心に、「東北発 災害復興学入門——巨大災害と向き合う、あなたへ」（平成25年9月 山形大学出版会）が刊行されたが、連携の一つの成果である。編集・出版を

担当した山形大学では災害復興学テキストとして活用するという。

本学関係では、次の3教授が執筆している。田端健人「奥尻島視察レポート」、佐藤静「災害と心の支援」、松岡尚敏「シティズンシップ教育としての災害復興教育」。

③ 大郷町教員研修会

津波の被害こそなかった大郷町であるが、誰もが体験したあの大きな揺れによる心理的影響は計り知れないものがある。それは児童生徒も同様であろう。学校生活においてそのような状況から解き放つことができるのは、やはり授業の充実である。

12月24日（火）、大郷町教育委員会主催、本センター共催で児童生徒が学ぶことを楽しみ、わかることのできることの成就感を味わえるようにするための授業づくり研修会が開催された。

「東日本大震災の影響が懸念される児童・生徒を考慮した授業づくり」をテーマに、教育復興支援センター教員が、学校生活での授業時間の占める割合を基に授業を通した教育経営の在り方、思考力・判断力を高めるために表現力を重視した授業経営の在り方、授業を軸にした児童生徒の学ぶ意欲の向上や教職員の指導意欲の向上のための学校運営の在り方等についての講話を行った。



④ 国際教育シンポジウム2013

平成26年2月1日（土）に、「国際教育から見える地域コミュニティ～震災後の東北から～」と題して国際教育シンポジウム2013を開催した。

本学では、国際教育のための資源（人材、教材、情報等）を学校教育（国際理解教育や教科外教育）へ還元する方策について、仙台市教育委員会、仙台市小中学校教育研究会などと共に検討組織をつくり、提案モデル事業やシラバス作成に関する検討を進めてきた。当日は、研究者や教員、学生など約80名が講演や討論に耳を傾けた。

シンポジウムの前半では、宮城教育大学特任准教授の根本アリソン氏から「イギリスから福島へ、本当のふるさとは何？」と題して基調講演が行われた。英国出身のアリソン氏は、福島県内で長年ALTを務め、震災時は大郷町教育委員会に勤務し、避難生活を送りながら南相馬市で小学生に英語を教え、現在大学で小学校外国語活動や英語教育講座を担当する傍ら、学生と震災関連のボランティアにも取り組まれた体験を通して、災害時におけるコミュニティの大切さについて講演された。

シンポジウムの後半では、グループワークが行われ、分科会Ⅰでは仙台市立桜丘小学校の松下教諭から、防災と外国語活動を組み合わせた実践を模擬授業形式で紹介され、仙台市内の2人のALT（カールステン・コノハ氏、レジナ・ロクヤン・ソ氏）から海外の防災事業について紹介された。分科会Ⅱでは青年海外協力隊の経験を活かした震災後の地域再生支援について、名取市と岩沼市を中心に支援

東日本大震災

活動を行っている山本氏と青木氏が現状や課題について発表した。いずれの分科会とも、会場の参加者も交えて活発に意見が交わされた。



講演をする根本アリソン氏



松下教諭の模擬授業の様子

4 子ども対象・参加イベント事業

日程	実施場所	実施内容	派遣 実人数	延人数 (参加人数)
6月8日	仙台市農業園芸センター (仙台市科学博物館)	こども☆ひかりフェスティバルの補助(※仙台市科学博物館より依頼)	23	
6月19日	大和町立鶴巣小学校	総合学習における体験学習での指導支援	15	
7月1日	宮城教育大学	仙台市立中野小学校「ヤギふれあい体験活動の実施」	主催	13
7月26日	気仙沼市立階上小学校図書館	楽器作りワークショップ	12	
7月26日	女川町総合体育館	女川町民を対象とした交流イベント	共催	20
9月15日	気仙沼市本吉公民館	スペースラボ in 気仙沼として、気仙沼市小学生を対象とした実験工作教室	主催	22
9/27～29	女川・石巻・荒浜地区・宮城教育大学	沖縄県立芸術大学被災地視察、教育復興ワークショップの開催	主催	30
10月12日	東北歴史博物館	仮設住宅の児童を対象とした秋の博物館イベント運営補助	4	
10月17日	宮城県宮城野高等学校	「チャレスポ!宮城野!」運営補助(※仙台市立中野小学校の依頼による)	3	
11月9日	仙台市立東六郷小学校	音楽イベントの運営補助	6	
11月23日	石ノ森漫画館	本学技術教育講座主催のクリスマス工作イベントへの協力	協力	30
11月30日	登米市内応急仮設住宅	仮設住宅住民を対象とした天文イベント	9	
12月1日	仙台市天文台	スペースラボと題した実験工作教室	主催	15
12月7日	気仙沼市階上中学校仮設住宅 集会所	仮設住宅に住む親子を対象とした「お菓子の家作り教室」	13	
12月14日	石ノ森漫画館	本学技術教育講座主催のクリスマス工作イベントへの協力	協力	30
12月15日	気仙沼市総合体育館	気仙沼市での小学生・親子を対象とした運動支援イベント	協力	100
12/22～23	アエル	こども☆ひかりミュージアムストリートの運営補助(※仙台市科学博物館より依頼)	5	
2月8日	東北歴史博物館	仮設住宅の児童を対象とした冬の博物館イベント運営補助	5	
2月15日	気仙沼階上学童センター	学童保育での学習・遊び支援ボランティア	6	
3月15日	仙台市立東六郷小学校	卒業式で音楽演奏ボランティア	4	4

① 女川を元気にする会

7月26日（金）、女川町立女川中学校において、交流会「女川を元気にする会」が開催された。女川中学校と仙台市立桜丘中学校、台原中学校、桜丘小学校、川平小学校との児童生徒、保護者との交流が行われた。

交流会では、桜丘小学校・川平小学校の児童によるリコーダー演奏、桜丘中学生による合唱、台原中学生によるエールが行われ、女川中学校からは震災に対するプレゼンが行われた。

また、ジャパン空手クラブの空手道演武も行われ、交流会後、保護者による焼きそばなどのフード提供がされ、参加者全員で会食をともにした。



女川中学生による震災についての発表



桜丘中学生による合唱



空手道演武



かき氷や焼きそばの提供

5 心のケア支援事業

日程	実施場所	実施内容	延人数 (参加人数)
7月6日	仙台市旭丘市民センター	佐藤静教授、野澤副センター長／公開研究会「不登校・適応支援の原点」	120
1月20日	仙台市青年文化センター	佐藤静教授／不登校支援の「これまで」と支援の輪を広げた「これから」	500
1月26日	聖ウルスラ学院英智小中学校・高等学校	本図教授、藤代特任教授、野澤副センター長／いのちの教育実践交流会 in 宮城「防災教育と心のケア」	150
3月1日	仙台市シルバーセンター	震災から3年—これからの子どもたちの元気を支援するために	80

1 特別支援教育フォーラム「震災から3年—これからの子どもたちの元気を支援するために」

平成26年3月1日、仙台市シルバーセンターで特別支援教育フォーラム「震災から3年—これからの子どもたちの元気を支援するために」が開催された。基調講演の講師である女川町の村上教育長は、震災から3年を経過した今、女川町の子どもの現状を説いたうえで、被災地の子どもたちの心の支援が求められていることなどを力説されていた。パネルディスカッションでは、郷間京都教育大学教授、藤森武蔵野大学教授、今野石巻支援学校長らが、支援を必要とする子どももそうでない子ども一人一人に目を向けて教育することの大事さについて説いていた。参加者たちは震災から3年の節目に、これからの変わり行く支援の在り方について熱心に耳を傾けて聞いていた。



熱心に耳を傾ける参加者



パネリスト・講師・コーディネーターの各氏

6 こころざし・キャリア教育事業

日程	実施場所	実施内容	参加人数
7月29日	東松島市コミュニティセンター	東松島市教員研修会「志教育講演会」	300

① 「学校における志教育の在り方について」=志教育講演会=の開催

大きな津波被害を受けた東松島市において、7月29日（月）に児童生徒のキャリア教育の充実に資するため東松島市教育委員会との共催で「志教育講演会」が開催された。講師として、筑波大学教授藤田氏を招き、「学校における志教育の在り方について」を演題にキャリア教育の必要性、重要性について国の教育振興基本計画との関連や、具体の実践事例の紹介まで多くの視点から話をいただいた。

当日は、東松島市立の学校関係者ばかりでなく、隣接する市町村立学校教職員や県立高等学校教職員など約300名の参加者が講演に耳を傾けた。

参加者からは、震災の復興に向け、学校や地域、児童生徒の実態を踏まえた志教育の在り方について大きな示唆をいただいたという感想が寄せられた。

主催：東松島市教育委員会

共催：宮城教育大学教育復興支援センター



- ①日 時 平成25年7月29日（月）13:30～16:00
- ②会 場 東松島市コミュニティセンター
- ③対 象 東松島市立学校教職員、東部教育事務所管内小中高等学校教職員
- ④講 演 演題 「学校における志教育の在り方について」
講師 筑波大学教授 藤田 晃之
- ⑤内 容 ★各種のデータが示す子どもたち・若者たちの今
★日本の教育の本当の危機
★新しい学習指導要領におけるキャリア教育の位置付け
★キャリア教育推進施策の動向
★キャリア教育実践の方向性 等





踏み出そう！子どもたちの笑顔のために

あすへ向けての軌跡 震災から3年を経て

Ⅲ

研究開発部門

1 研究部門の充実

教育復興支援センターには、刻々と変化する被災地の状況を把握し、復興支援ニーズを検討するとともに、それらを国内外の他機関へと発信し、共有していくため、研究開発部門を設置している。その機能を充実させるべく、平成25年4月から、本学の兼務教員に加えて2名の特任教員を配置して協力しながら調査・研究を行っている。6月のセンター棟開所後、本格的に研究会や現地調査、共同研究などが始まった。震災からの復興状況や、諸外国の防災への取組などを学び議論する「復興カフェ」を定期的に行い、本センターの役割と使命について理解を高め、取組への思いを新たにしている。

① 自然災害科学や地理学等の分野での震災復興・防災に関する学術研究 ——東日本大震災からの教訓と知見の蓄積へ

被災した自治体・教育委員会などの協力を得ながら、被災した地域社会や学校を取り巻く現在の課題や復興の状況の把握に努めている。特に、転居や仮設暮らしを余儀なくされている被災者の空間的移動と地域との関係や、街づくりの課題などについてモニタリングを進めている。

また、教員養成系大学として教育委員会や学校現場との連携実績がある本学の長をを活かし、東日本大震災で実際に多くの学校が避難所として用いられたことについて、その経験と課題に関する情報収集を行い、記録していく。

被災地域においては、復興、そして新たな防災の取組の過程で、学校が大きな役割を果たし得ると考えている。そこで、教育委員会や学校現場との連携は、従来にもまして重要になってくると思われる。

そして、専任教員の専門である、社会地震学や地理学の立場から、津波被災地に特有の自然環境（地震災害や津波災害に関わる地盤特性と地形地質などの環境）と社会環境（主に地域社会の仕組みや居住環境）の把握に努め、津波災害からの避難行動に関する事例について情報収集を行っている。

研究開発部門では、日本地震工学会、日本建築学会、東北地理学会、日本地理学会被災地再建研究グループなどの学協会の活動にも参画し、国内外の研究者との討議を通じた学術交流も積極的に行っている。



宮教大防災 Week 市民講座

② 他大学との連携・共同研究の実施

① 東北大学 災害科学国際研究所

多くの犠牲を払いつつ、震災から得られた教訓と知見の蓄積に基づき、次なる災害に備え、新たな防災教育の展開と、そのための教材づくりに取り組んでいく。

本センターでは、東北大学災害科学国際研究所の研究者らと連携して研究会やワークショップを開催し、東日本大震災からの復興支援に資する研究、大災害の教訓・経験を踏まえた新たなコミュニティ防災の共助の場を創出の実践のための取り組みを進めている。コミュニティ防災では、行政、学校、消防団、自主防災組織、町内会、民間企業、NGO・NPO など様々な主体が協働して危機に備えることが重要である。教員養成系大学として、この新たなコミュニティ防災におけるパラダイムシフトにおいて、学校がいかなる役割を果たしうるのであるのか、それにはどのような課題があるのかなどについて究明していく。



横浜市立北綱島小学校との学校・地域防災交流会

② お茶の水女子大学 シミュレーション科学教育研究センターほか

お茶の水女子大学（東京都文京区）の研究者らと、共同研究等のプロジェクトを開始した。これは、気仙沼市教育委員会等の被災地の教育関係機関と相互協力の協定を締結していることや、本センター特任教員が、同大学より転入したネットワークを活かしたものである。現在、同大学シミュレーション科学教育研究センターとの共同研究を通じて、避難所運営のためのシミュレーション教材の開発と検証プログラムに参画している。そのため、定期的な研究会の開催や意見交換会等を実施して、東日本大震災の教訓・知見を活かした、学校における避難所運営に役立つ教材開発を継続していく。

③ JICA 集団研修

平成 25 年 11 月 1 日、本学で研修中だった独立行政法人国際協力機構（JICA）の教員研修生（7 か国 9 名）に対する研修の一環として、気仙沼市教育委員会を訪問した後、唐桑半島にある小原木中学校による海拔表示プロジェクトの実践を学んだ。翌 2 日、お茶の水女子大学文教育学部グローバル文化学環と本センターが共催して、気仙沼市に隣接する岩手県陸前高田市の米崎小学校仮設住宅にて、国際交流 BBQ を開催した。教員研修生らは自国の伝統料理を振舞い、仮設住宅にお住まいのお年寄りや子どもたちは、身振り手振りを含めて交流を深めた。また、それに先立って、同仮設住宅自治会長で、NPO 法人・桜ライン 3.11 副代表の佐藤一男氏から、JICA 研修生及び参加学生に対して、東日本大震災時の避難所の運営、復興の現状に



気仙沼市立小原木中学校での津波防災教育の取組を学ぶ JICA 教員研修生

関する講話をいただいた。

本センターとしては、こうした他機関との有機的な連携関係を最大限に活用し、被災地のニーズ把握、教訓・経験の収集・蓄積、そしてそこから得られた知見の発信に努めたいと考えている。



陸前高田市の仮設住宅における JICA 教員研修生との交流

③ グローバル連携を通じた東日本大震災の教訓・知見の海外発信

災害からの教訓は、広く国内・国外に共有継承されてこそ活かされる。本センターでは、国内外の他の関係機関と連携して、上述の震災からの経験、教訓・知見を共有するとともに、同じく大きな災害を経験した他の被災地と協働して知恵を出し合いながら、復興を前進させるための一助とすることをめざしている。

本学はこれまでも環境教育や持続可能な開発のための教育（ESD）、ユネスコスクールなどの取組を通じて国際社会とのネットワーク構築に積極的に取り組んできた。連携協定先であるタイ教育省国際教職員研究所との研修交流や JICA 集団研修などの機会を通じて、防災教育、避難所運営等の分野での研究者・実務家交流を進めている。特に、平成 27 年 3 月に仙台市にて第 3 回国連防災世界会議が開催されることから、それに向けて、宮教大準備室を設置して、準備会合を開催しはじめ、効果的な情報発信や議論の進展の方途を見出す取組を行っている。



タイ教育省事務次官 Dr. Kamol RODKLAI 他研修訪問団との名取・岩沼訪問



カンタベリー大学（ニュージーランド・クライストチャーチ）復興プログラム関係者を訪問しての知見交換



平成 23 年 2 月に被災したクライストチャーチ市内の遺構

④ 復興カフェ in Miyakyoの実施

教育復興支援センターでは、前年度に引き続き、日頃の復興支援活動や、新たな防災教育に役立てるため、災害復興や防災・減災に関連するテーマでの話題提供をいただく場として、「復興カフェ in Miyakyo」を実施している。

第3回	4月18日	「宮古市田老地区の現状について」 瀬尾和大副センター長
第4回	5月29日	「未来へ継ぐ」 菊田真由（家庭科コース・1年）
第5回	6月10日	「フィリピンの自然災害と防災教育」 アモーレ・デ・トレスフィリピン・キャピトル大学教授
第6回	6月26日	「震災をわすれないために～学生からのメッセージ」 赤間仁美（国語コース・1年）、首藤大知（数学コース・1年）、渡辺壮太（家庭科コース・2年）
第7回	8月19日	（附属図書館と共催） 「持続し復元力ある地域をつくるコミュニティの物語」 スティーブ・リード・ジョンソンポートランド州立大学教授
第8回	10月31日	「台風26号による伊豆大島における災害と支援」 瀬尾和大副センター長、小田隆史センター特任准教授
第9回	11月20日	（学生企画・学び喫茶と共催） 「フィリピン台風30号—私たちにできる恩返しを考えたい」 清水卓樹（数学コース・4年）ほか学生有志
第10回	3月17日	「地域おこしや過疎化対策などの地域活性化を対象とした、人材育成における大学と地域連携の役割」 鈴木克徳 金沢大学環境保全センター長・教授

⑤ 「紀要」の刊行

昨年度に引き続いて、教育復興支援センター紀要を刊行し、本センターの活動に関係する調査研究、教育実践に関する論文等を集約、発信している。

詳細は、後述する「V 刊行物」に掲載している。本論文は、教育復興支援センターのホームページから無料で閲覧できるほか、国立国会図書館にも献本している。

⑥ 研究プロジェクト一覧

教育復興支援センターでは、復興支援、防災教育に係る下記のプロジェクトにも取り組んでいる。

	件 名	主 担 当
1	防災教育創造プロジェクト	野澤 令照
2	仙台 P4C 推進プロジェクト	野澤 令照
3	キャリア教育研究開発プロジェクト	野澤 令照
4	防災教育における国際協力・協調・理解に関する教育資源活用の実践的取り組み	村松 隆
5	防災マップ・教材プロジェクト (防災マップ・防災復興教育教材の作成プロジェクト)	小金澤孝昭
6	東日本大震災以降の児の発育状態に関する研究	黒川 修行
7	教員養成教育における環境・防災教育	齊藤千映美
8	DSAT（災害時派遣学校支援チーム）プロジェクト	田端 健人

2 新たな教育の創造

東日本大震災の経験から、「命」や「生き方」の大切さを改めて認識させられた。また、災害から身を守り、復興を成し遂げるためには、自助・共助の心を育まなければならない。こうした目的を果たすために新たな教育が注目されている。今年度、初めて取り組んだ実践について紹介する。

① 仙台p4c推進プロジェクト(p4c: philosophy for children)

東日本大震災からの教育復興に不可欠な「命の教育」「生き方教育」の一環として、p4c：子どもの哲学の研究及び実践に取り組んだ。

ハワイ大学で開発されワイキキ小学校等で10年以上も実践を積み重ね、探究する力やコミュニケーション能力、さらに相手を思いやる心が育つなど、大きな成果を上げてきた。東日本大震災の被害を受けた学校への支援を申し出たワイキキ小学校と仙台市の若林小学校の交流が生まれ、それを契機にp4cが紹介された。

折しも、教育の復興をめざしていた仙台市の教育関係者（小中学校の校長、大学の研究者等）が、今後の可能性を感じ、プロジェクトとして取り組み始めた。平成25年8月から始まった活動だが、仙台市内での実践校もすでに6校を越え、短期間のうちに実績を上げ始めている。

12月には、仙台市教育課題発表会で2校が実践発表をしたり、開発者であるハワイ大学のジャクソン教授が来仙するなど、ますます発展を続けている。

○パンフレット

【資料】 p4c：philosophy for children（子どもの哲学）に関して（次ページ参照）

○**子どもの哲学**：子どもと共に行う対話型の哲学教育。幼稚園・保育所から小・中学校、高校まで実施。

ヨーロッパからアジアまで、世界各地で取り組んでいる。

開発時期：1960年代後半 ニュージャージー州

開発者：アメリカの哲学者 マシュー・リップマン教授（モンクレア大学）

※哲学対話の有効性

① 対話によって思考力が育成される。

② 「探求の共同体」をつくることによって、人間関係の絆が深まり、市民性が育成される。

○ハワイにおける子どもの哲学

1980年代半ばに、ハワイ大学のトーマス・ジャクソン教授が考案（改良）したプログラムを小学校で行った。以後、ホノルルを中心として初等・中等教育のさまざまな教室の中に導入している。

- ・ワイキキ小学校では、「子ども哲学」という名前の科目を導入。「哲学的思考は、自分の目標を追求し、世界をポジティブに変化させるための準備となる」という理念を掲げている。
- ・カイルア高校やアイエア中学では、社会科（人種教育）、英語、歴史など通常科目の中に哲学対話の要素を取り入れている。

○ ユネスコの活動

こうした子どもの哲学の効果に注目し、1995年に「哲学のためのパリ宣言」、2005年に「哲学についてのユネスコ間域戦略」を打ち出し、子どもの哲学を世界的に奨励している。

宣言の中では、哲学の一つの効果としてカウンセリング効果を上げているが、それは、ただ自分の心を抑制し、現行の社会に適応することを求めるものではなく、問題の真の在りかを明らかにして、それに集団や社会として対処していこうとするものである。

p4cが目指すもの

探究心が豊かな子ども
簡単には答えを出すが出来ない問いに対して、真実に向き合いながら理解を深める力を育む

問いを深める「探究の対話」
対話を通して他者と問いを共有し、さまざまな視点から考えを盛り下げていく

安心できるコミュニティ
深い対話を実現するためには、心にゆかんだ考えを素直に分ち合える仲間づくりが必要



p4cという対話学習を仙台の学校に生かしていこう！ p4c せんだいの試みは、2013年8月に開かれた「探究の対話」の勉強会から始まりました。p4cに取り組みでみたいと考えた有志の小中学校がつながり、少しずつ実践を積み重ねています。子どもたち同士の間には、学校のさまざまな場面で必要となります。学級活動、外国語活動、総合学習の時間のほか、各教科の学習にも生かす方法を模索しています。

ピーフォーシー
p4c せんだい
「探究の対話」という新しい学びのかたち



p4c せんだい推進プロジェクト

問合せ先
国立大学法人宮城教育大学
教育復興支援センター
副センター長 野澤令嗣
022-214-3661
nozawa-n@staff.miyakyo-u.ac.jp

p4c: philosophy for children
子どものフィロソフィア

子どもの探究心を育む p4c という学習

なぜ？ どうして？ 対話を通して「問い」を掘り下げながら考える力を深めます
p4cでは、子どもたちが問いや考えを共有しながら、テーマについて理解を深める「対話」を行います。日々の暮らしや学校の学びの中から生まれた問いについて、ゆっくりじっくり考える時間を作り、「知りたい！」と思うこととをみんなで一緒に探究していきます。問いや考えを分かち合うことのできるコミュニティづくりから始め、深く深く考えを掘り下げるスキルを学んでいきます。



ハワイ大学 p4c 上級アカデミーディレクター
トーマス・エリクソン博士

p4c せんだいでは、p4c 推進の拠点の一つであるハワイ大学上級道徳哲学研究センター（上高アカデミー）と連携し、探究の対話の実践を進めています。



「探究の対話」5つのステップ

- 1. 輪になって座ります**
お互いの顔が見えるように、輪になります。コミュニケーションを図るうえで、互いの表情が分かることが重要です。
- 2. 問い（対話のテーマ）を決めます**
教科の内容にかかわる問い、日々の生活から生まれた問いなど、互いに問いを共有し、問について考えるかを決めます。互いの分からない問いを考えることがポイントです。
- 3. 対話のルールを確認します**
問いや考えを安心して共有できるように、話し合いのルールみんなで作って、毎回対話の始めに確認します。
- 4. 対話を行います**
子どもたち同士で対話を進めていくことができるように開発されたツール「コミュニティ・ボール」「ツールキット」などを使いながら、対話を進め、考えを深めていきます。
- 5. 対話のふりかえりをします**
終わりの時間になったら、ふりかえりをします。聞く姿勢、話す姿勢、コミュニティのセーフティなどを、一人ひとりがふりかえります。

※教師の役割：教師は、対話の進行をサポートし、場の安全性、対話の深まりなどに目を配ります。ただし、最も重要な役割は、子どもたちと一緒に問いを考えることです。

② 教育復興の担い手育成

教育の復興を推進していくとき、その担い手の育成が重要である。宮城教育大学では、教員養成という本来の人材育成に加え、本センターを中心にして、地域社会を豊かにするために活動する市民の育成、リーダーの育成に取り組み始めた。被災地にある唯一の教育大学として新たな境地を開いた。

その中心となったのは、「学びを通じた被災地の地域コミュニティ再生支援事業」だが、運営母体である実行委員会には、学外からも有識者や県・市町村教育委員会の教育長など多くの方々の協力をいただいている。

この事業に取り組む意義は、大学改革が叫ばれる中で地域に根差した教員養成大学としての姿勢を明確に示せることや、社会総ぐるみの教育が重要視される時代に求められる教師を養成できることなどがあげられる。来年度も、さらに充実した取り組みにしたいと考えている。

<復興に向けて育てたい教師像>

- ①学校は児童生徒の教育の場にとどまらず、地域住民の生涯学習の場となっていることから、地域連携の大切さを理解できる教師を育成したい。
- ②社会総がかりの教育を推進するために、地域連携の重要性を理解し、コーディネートできる教師を育成したい。
- ③大震災からの復興を担う子どもたちを導くために、教師自らが復興や地域の抱える課題を把握し、解決に向けて努力する教師を育成したい。

～学びを通じた被災地の地域コミュニティ再生支援事業～

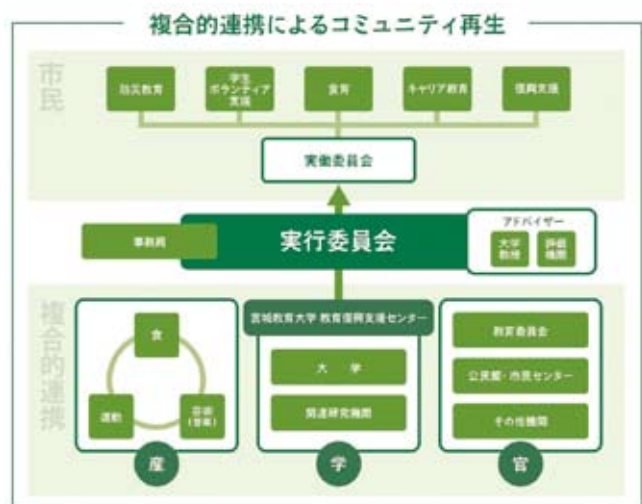
取組の基本理念

産・官・学など多様な主体が連携して被災地の復興を推進するとともに、一過性のものとせず、長く地域に根差す仕組みづくりを実現する。

事業概要

宮城県内の被災地における地域コミュニティの再生を目指し、学びを通じた支援事業を実施する。地域の復興を支援するにあたり、被災地を抱える自治体との連携を図りながら、以下の内容を進めていく。

- I：地域における活動を担う人材の育成
- II：人と人とのつながりを再生する学びの事業の推進
- III：学校と地域とが協働で取り組む防災教育の創造と実践
- IV：コミュニティ再生を支える地域連携組織の構築



③ 教育大学としての新たな取組

被災地にある唯一の教育大学として、新たな分野への取組も始まっている。平成 25 年度から教育復興支援センターを事務局とした実行委員会で取り組んだ事業に、「学びを通じた被災地のコミュニティ再生支援事業」がある。文部科学省が、被災地の自律的な復興に向けて立ち上げた事業であり、地域コミュニティ再生のための学び場づくり、地域で主体的に参画する人材育成、子どもたちの良質な育成環境整備をめざすものである。

地域住民の生きがいをどこに求めるのか、子どもたちの将来をどう築くのか、未来を切り開く人材をどう育てるのかなど被災地の復興に寄与する教育大学として、新たな境地を開く取組となっている。

【事業の一環として取り組んだ実践例】

宮城県内の被災地における地域コミュニティの再生をめざし、学びを通じた支援事業を実施する。基本理念としては、産・官・学など多様な主体が連携して被災地の復興を推進するとともに、一過性のものとせず、長く地域に根差す仕組みづくりを実現したいと考えている。

事業構想としては、3年から5年の中長期的な見通しを持ちながら、宮城教育大学を拠点とした事業運営を行う。地域の復興を支援するにあたり、被災地を抱える自治体との連携を図っていく計画だが、取り組む内容として、以下の項目を基本に進めていく。

- I：地域における活動を担う人材の育成
- II：人と人とのつながりを再生する学びの事業の推進
- III：学校と地域とが協働で取り組む防災教育の創造と実践
- IV：コミュニティ再生を支える地域連携組織の構築

取組の概要

【学生企画「学び喫茶」・被災地視察研修】

活動を担う人材育成

場所：学内・気仙沼市・南相馬市

内容：被災地でボランティア活動に取り組む学生たちが、自ら企画した活動。被災地訪問や海外（フィリピン等）への災害支援を行った。



【食の学びによる地域づくり】

つながり再生めざす学びの事業

場所：仙台市・塩釜市（野々島）

内容：宮城の食文化資源を活用して、地域での「食の学び」の機会や実践の効果を多様な「地域づくり」に発展・進化させる。



【防災連続講座】

協働で取り組む防災教育の創造

場所：仙台駅直結複合施設アエル1階アトリウム

内容：広く市民に防災に関する学びの場を提供するために1週間連続計18講座を開催。

東日本大震災の経験を次代へ語り継ぐ意識を醸成。

平成27年3月開催予定の国連防災世界会議へもつなげたい。





踏み出そう！子どもたちの笑顔のために

あすへ向けての軌跡 震災から3年を経て

IV

人材育成

1 学生ボランティア活動の実際

1 教育復興支援センターボランティア協力員

○総会 4月24日

2年目を迎えた協力員。入学式後のオリエンテーションでセンター長からのボランティア活動の必要性和参加を促すあいさつがあった。また、前年度の活動の様子を伝えるDVDの配布により、新入生69名を含む100名あまりが出席。席上、1・2年の代表が承認された後、年間予定、役割分担、被災地視察研修について説明がなされた。

その後、1・2年の運営委員の協議により、以下のとおり係分担が決められ、係ごとに原案が検討され、それに基づいて各種行事が企画運営された。

具体的には、不安解消会、視察報告会、ボランティア報告会、大学祭、海外交流、ホームページ制作、実態調査、掲示板、海外向け冊子制作の9チームである。

○不安解消会 7月17日（学習支援ボランティア研修会、壮行式を兼ねて開催）

学習支援ボランティアに初めて参加する学生も多く、学習支援にあたってどのように子どもたちに向き合うかという心構えや質疑応答、事務手続き等の説明があった。

センター長のあいさつに続き、学習支援に限らず多様な種類のボランティア活動に参加してきた4年生、被災地にある高校時代に大学生からの支援に感謝したいとする1年生の経験談の発表があった。

引き続き、不安解消グループ代表から、資料「Q&A」によりそのエッセンスの説明、最後に学生代表から夏休み中のボランティア活動への決意表明があった。



～不安解消Q&A～

Q 被災した子どもたちに接する際、何か気をつけることはありますか？

A 震災や被災状況についての話題は、持ち出さないように気をつけてください。筆者も被災者の一人ですが、普段震災を思い出すことは少なく、元気に過ごしています。しかし、震災の話題に触れると、辛く悲しい気持ちになります。よって、震災の話題は避け、ごく自然に明るく接しましょう！

Q 指導のポイントはありますか？

A 子どもたちは、夏休みの期間にせき学校にきているのですから、単なる答え合わせにならないようにしましょう。分からない問題は一緒に考えてあげるといいですね。また、勉強法をアドバイスしてあげるのもいいかもしれません。

Q 学習支援のボランティアに参加するのは習生だけですか？

A 全国の教員養成大学など、他大学と連携することも多いです。今回のボランティアが、他大学との交流の良い機会になるかもしれませんね。

Q 長柄の一言をかけるのが難しいです。アドバイスはありますか？

A 「はめること」から始めてみてはどうですか？
「よく来たね」「字がきれいだね」「頑張っているね」
何でもいいです。子どもたちは学生からの声かけを待っていますよ。

Q 長期的な宿泊があるボランティアでは、ボランティアの時間以外は何をするのですか？

A 宿泊先の教育委員会の配慮により、研修会、被災地研修が行われることもあります。

Q 指導のために、何か事前準備は必要ですか？

A 多くの学校では自学自習の支援を行うので特にありませんが、一部の学校では授業形式をとり、事前に教材を作成する場合があります。（くりはら塾、中学校）

Q 担当する児童・生徒の人数はどれくらいですか？

A 一般的には1学級20～30名を2、3人で担当することが多いです。1対1対応の場合もあります。

その他の疑問点は、ボランティア協力員や教育復興センターへ相談を。☎214-3667

○大学祭 10月26日～27日

展示の部 学習支援ボランティア活動、紙とんぼづくり

発表の部 ボランティア報告会（9団体）

フォーラム（震災時の学校対応とこれからの防災教育）

展示ブースでは、今年度実施した12の学習支援ボランティア等の活動の様子が描かれたパネルが展示され、協力員が来場者へ展示資料の説明にあたったほか、ボランティア活動や復興支援に関する懇談スペースなどを設け、来場者との交流を深めた。

報告会では、テーマを「宮教が考える震災復興～学生ボランティアの復興支援～」とし、学内で特色ある取組をしている9団体から活動内容とその成果について報告があった。

フォーラムでは、テーマを「震災時の学校現場とこれからの防災教育」として、東日本大震災で被災された学校の状況や被災対応、その後の防災教育の現状を詳しく知る機会とした。「学校現場の被災対応」、「これからの防災教育」として4名の先生方からご講演いただき、質疑応答を行った。講演では、災害時の情報収集の大切さや教員の役割、緊急時の備蓄や心のケア、主体的な防災訓練や体験を伴う防災活動等の実践例と、学生ボランティア活動の重要さが強調されていた。

大学祭への参画を通して、学生同士が互いに協力し合い、ボランティア活動の意義や今後の防災教育への関心を高め、同時に、ボランティア活動を継続していくことの大切さを学ぶ大きな機会となった。



○総会 1月15日

この1年間の活動概況、成果と課題について報告があった。成果としては夏休みのボランティア活動への参加者の増加が挙げられたが、課題として各行事への参加者の少なさ、未実施の行事があったことが反省点として挙げられた。最後に、次年度の新生協力の勧誘の仕方を検討し、新運営委員の希望者を募った。

2 学生企画

1・2年生の協力員以外に、3・4年生を中心にさまざまな活動が行われている。一部は協力員運営委員と共同で実施した行事も多い。その主なものは以下のとおりである。

①被災地視察研修

センターが主催した被災地視察研修以外に、学生企画の被災地訪問、〈気仙沼ツアー〉、〈南相馬ツアー〉

が実施された。2つのツアーにおいては、各地出身の学生が事前に下見をして、それぞれの見学先、コース、説明者を決定し、被災直後の様子、現在に至る復興状況等の説明がなされた。資料作成、車中での「ご当地クイズ」のお楽しみ企画など、学生の発想の豊かさが発揮された。

〈気仙沼ツアー〉10月26日

旧気仙沼向洋高校舎ーリアスアーク美術館ー第18共徳丸ー気仙沼プラザホテル屋上
共徳丸の撤去直前の姿を目にとどめることができた。

〈南相馬ツアー〉12月7日

山元町立中浜小学校ー南相馬市（瓦礫処理場ー市役所小高庁舎ー小高駅前ー村上地区）

今回訪れた小高区のほぼ全域が、双葉町にある福島第一原子力発電所から20km圏内にあり、避難指示解除準備区域となっている。原町区、鹿島区が避難解除区域であるのと対照的である、数kmの遠近の差が明暗を分ける結果となった。

学生の感想によると、福島復興の立ち遅れ、「音のない町（南相馬市役所小高庁舎～JR常磐線小高駅付近）」、「時間の止まった集落（小高区村上地区）」と記載されていたのが印象深い。



ホテル屋上からの被災状況の説明



津波被災後、解体できないままの家屋～小高区村上地区～

②学び喫茶（第9回復興カフェ in Miyakyo）11月20日

フィリピンの台風30号被害について、「私たちにできる恩返しを考える」として、市瀬教授、フィリピンの留学生から被害の現状の説明があった。その後、テーマについて話し合いがもたれ、募金活動も開始された。また、この日にあわせて「学長緊急メッセージ」が発せられ、席上紹介された。



学長緊急メッセージ



Miyagi University of Education

フィリピン中部における台風 30 号被害に関する見上学長緊急メッセージ

猛烈な台風第 30 号（アジア名「ハイエン」；フィリピン名「ヨランダ」）がフィリピン中部を横断し、レイテ島等を中心に、相次ぐ洪水や土砂崩れ等により、多数の死傷者や避難民を出すなどの甚大な被害が生じています。

宮城教育大学を代表し、この度の台風災害によって多数の人命が失われ、多くの人が被災されていることについてお悔みやお見舞いを申し上げます。また、大学として被災地の復旧・復興にかかる支援を惜しまないことを申し上げます。

現在、本学教育復興支援センターを通じて、被災状況の収集、支援ニーズの確認などを行っており、今後、本学と関わりが深いユネスコや国連大学の地域拠点、東南アジア教育大臣機構（SEAMEO）等のネットワークを通じて支援を具体化していきます。既に、東日本大震災被災地でボランティア活動を展開する本学の学生らを中心に、東日本大震災でご支援いただいたフィリピンの人々への恩返しの意味も込めて、義捐金の募集や情報交換活動も開始しています。

宮城教育大学は、東日本大震災後、教育復興支援センターを設立し、被災地区に通う児童・生徒や学校現場への支援を実施しています。あの災禍からまもなく3年、いまだ復興の途上にある我々は、自然の猛威と災害による喪失の痛みや無力さを感じつつも、苦難のなかで希望を見出すべく行動してきました。これまで展開してきた活動の中で、被災した子どもたちにとっての学校は、災害の復興過程において学び合い、友達と会い、励まし合う拠りどころであることを強く認識しております。

災害後の安定的な学習環境の提供は、児童・生徒の将来を守っていくために重要です。フィリピンの被災地においても、今後、INEE（Inter-agency Network for Education in Emergencies）の緊急時の教育ミニマムスタンダードなどに照らしつつ、そのための努力がなされるでしょう。本学としても可能な限り、東日本大震災被災地の教訓も踏まえ、学校再建や被災した子どもたちへの教育の確保にかかる国際的な支援を実施していく所存です。

現在、東日本大震災の経験とそこから得た学びを国際的に共有すべく、アジア太平洋を中心に学校、避難所等の分野で教訓・知見を共有するネットワークの構築に着手しています。こうした矢先に起きた今回の災害に強い衝撃を受けつつも、被災地間協働を通じて、共に手を取り合い、着実に復旧・復興への歩みを進めて行きたいと思えます。

2013 年 11 月 20 日

国立大学法人

宮城教育大学長 見上 一幸

149 Aramaki Aza Aoba, Aoba-ku, Sendai, Japan 980-0845



Miyagi University of Education

President Mikami's Statement on the Typhoon Disaster in the Central Philippines

A devastating Typhoon *Yokanda* (No. 30; Asian Name: Haiyan) swept through the central Philippines wreaking havoc, causing casualties, and forcing evacuations following a series of flash floods and landslides, particularly on the island of Leyte and surrounding islands.

On behalf of the campus community of Miyagi University of Education, I would like to express my deepest condolences and sympathy for the tragic loss of lives and extensive property damage. I would like to add that Miyagi University of Education is ready to provide any assistance necessary to aid in the recovery from this historic disaster.

I have instructed the Director of the Center for Disaster Education & Recovery Assistance, M.U.E., to gather information on the situation and assess the needs for the relief efforts. We will materialize our assistance through our partner agencies such as UNESCO, United Nations University's Greater Sendai RCE/ESD networks, and the Southeast Asian Ministers of Education Organization (SEAMEO).

Already on our campus, a group of volunteer students who are actively engaged in assisting schools affected by the 2011 Great East Japan Earthquake and Tsunami here in northeastern Japan, have begun donations and outreach activities and have discussed what they can do to give back to our friends in the Philippines who have been so generous since the 2011 disaster.

To respond to and assist children of the affected communities in Tohoku, Miyagi University of Education established the Center for Disaster Education & Recovery Assistance immediately after the 2011 disaster. On the path toward recovery from the devastation, we have sought to overcome the reality of the force of nature and consequent destruction and loss while, at the same time, we remain hopeful for a brighter tomorrow. As educators, we are reassured that for the affected children, schools are a haven where they meet, learn, support, and encourage each other alongside their friends in the process of recovery.

Recently, we have begun to establish a global common network among our Asia-Pacific friends, sharing knowledge and good practices of school education in disaster risk reduction, recovery, and shelter management, taken from our experiences during the Great East Japan Earthquake.

We should strive to secure a stable and appropriate learning environment for the affected children in accordance with guidelines such as the INEE (Inter-agency Network for Education in Emergencies) Minimum Standards. In the meantime, we will participate in international assistance for the recovery of schools and securing of educational opportunities for the survivors based on the lessons learned and knowledge gained from our own disaster almost three years ago. Hence, together, we move forward and away from the natural calamities that have disrupted our lives.

Dr. Kazuyuki Mikami

President, Miyagi University of Education
November 20, 2013

149 Aramaki Aza Aoba, Aoba-ku, Sendai, Japan 980-0845

3 他大学との連携

① 沖縄県立芸術大学との連携 9月28日

沖縄県立芸術大学長の佐久本氏（劉衛流教師 8 段 ワールドゲーム空手部門・形競技 7 連覇）による空手道教室が開催された。

本学の空手部学生をはじめ多くの一般市民も参加し、稽古に汗を流していた。



また、同日、宮城県美術館で開催されていた彫刻の五・七・五展（世界で最小の定型詩俳句にならない、五寸（15cm）×七寸（21cm）×五寸（15cm）という制約された空間の中で新たな彫刻の可能性を探究した展覧会。本学学生も出品）で来仙していた砂川准教授と学生による漆喰によるシーサー作りのワークショップも開催された。荒浜小学校の児童とその保護者が参加し、あのような大津波が二度と押し寄せないための魔除けになってもらうことを願いながらシーサー作りに励んでいた。

②お茶の水女子大学附属高校（宮教大生の案内）気仙沼ツアー 12月15日

研究開発部門で連携しているお茶の水女子大学の附属高校のアフガン・ボランティア部員が宮城県を訪れた際、地元出身学生2名の案内により、気仙沼地域を巡り、被災当時の状況、現在の復興状況を説明した。世代の近い若者の視点から、被災地のいまを知り、風化を防止し、次の世代に経験を語り継ぐ活動として好評であった。



東京の高校生を案内する気仙沼出身の宮教大生

2 被災地視察研修

東日本大震災から3年が過ぎたが、津波の被害を受けた多くの地域が、未だ復興の緒に就いたばかりである。そんな現状を視察し、本学学生の教育復興に向けた学びへの契機にすることを目的に、被災地視察研修を6回開催した。5回目、6回目は学生が企画運営したものである。

	月 日	コース	参加者数
第1回	5月11日(土)	南三陸町志津川地区⇒南三陸町立戸倉小学校⇒石巻市立大川小学校	32名
第2回	5月26日(日)	南三陸町志津川地区⇒南三陸町立戸倉小学校⇒石巻市立大川小学校	28名
第3回	6月15日(土)	南三陸町志津川地区⇒南三陸町立戸倉小学校⇒石巻市立大川小学校	20名
第4回	6月16日(日)	南三陸町志津川地区⇒南三陸町立戸倉小学校⇒石巻市立大川小学校	32名
第5回	10月14日(月)	南三陸町志津川地区⇒気仙沼向洋高等学校⇒リアス・アーク美術館⇒気仙沼市内	28名
第6回	12月7日(土)	山元町立中浜小学校⇒南相馬市原町区瓦礫仮置場⇒小高区市街⇒小高区村上地区	23名

本学学生、協力員といってもその出身地の違い、被害の有無などにより震災への理解に大きな差がある。そのため、一緒に被災地を訪問し、被災状況を見聞することで共通理解を図ろうと被災地視察を実施した。

視察先としては、石巻市立大川小学校、南三陸町立戸倉小学校跡地、気仙沼市や南相馬市を訪れた。戸倉小学校では被災した当時の校長先生から、防災計画、当日の避難状況とともに、不安の一夜について説明があった。参加者は当日の児童と同じ経路をたどり、高台から五十鈴神社まで歩を進めた。

参加した学生からは、「『20メートルの津波』と言われても想像できないが、その場に立って『ここまで押し寄せた』と実感することにより、その時の子どもたちの恐怖はいかばかりだったかと思いをはせることできた。」などの感想が多く寄せられた。

そして、これからの学生生活への思いを、次のように語る学生もいた。「学校の被災状況を見て、教員の役割の大きさについて改めて実感した。子どもへの防災関連の教育を進める必要について、被災した私たちが伝えていかなければならないことを強く感じた。」



戸倉小学校の児童が避難した高台から
当時の校長先生の話



南三陸町防災対策庁舎前で合掌



踏み出そう！子どもたちの笑顔のために

あすへ向けての軌跡 震災から3年を経て

刊行物

1 教育復興実践事例集「明日の子どもたちのために」(第2集) 仙台市立小中学校校長会

昨年、被災の影響が未だ色濃く残るなか、子どもたちに創意ある教育活動に取り組んだ仙台市内の小中学校の足跡を、仙台市小学校校長会、中学校校長会とともに収集、編集した教育復興実践事例集「明日の子どもたちのために」を発刊し高い評価を得た。そこで、前年度に引き続き、その後各学校で新たに取り組まれた実践を第2集としてまとめたものである。

本編は、小学校編と中学校編に分かれ、小学校編では、教科と領域というジャンルだけでなくそれらの枠を越えた教育活動など83の事例を編集している。特に、被災6小学校の取組や被災校を受け入れた小学校の学校経営などの実践事例が寄せられている。

中学校編では、新たな学校防災教育、震災からの復興をめざした教育活動に分類し15校からの実践事例が寄せられている。

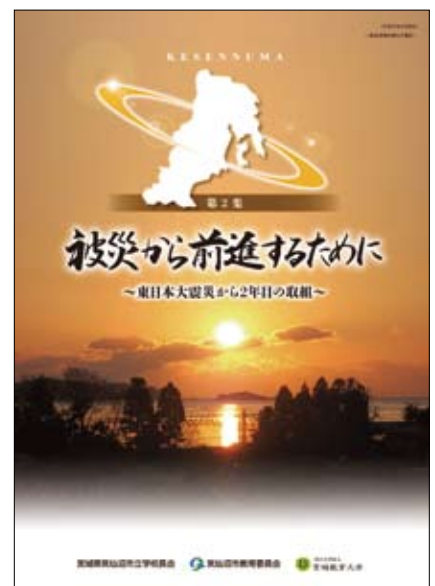


2 「被災から前進するために」(第2集) 気仙沼市教育委員会、気仙沼市立小中学校校長会

気仙沼市内小中学校の各校長自らが被災前の学校を概述し、それが被災によりどのように影響を受けたのか、被災直後の対応と学校の果たした役割、学校再開に至る経緯、地域と学校との連携など、将来に向けての課題と展望をまとめた第1集に続くもの。なお、第1集は多方面から高い評価を得て、その後英語版も刊行され広く国内外へ配布された。

第2集となる本冊子は、震災後2年目を迎えた各小中学校の取組、創意工夫を記録し、学びを共有する意義、各校長の「思い」を綴ることで、今後懸念される震災への対策、防災教育に貢献することを願って編集されたものである。

巻頭の白幡教育長による「気仙沼市における津波と津波防災教育への期待」では、明治29年、昭和8年の三陸大津波碑などが紹介されるとともに、小原木中学校の「海拔表示プロジェクト」との関連性に言及されている。それに続いて、教育復興に向けた気仙沼市教育委員会の取組と施策の具体も収録されている。



3 学生ボランティア活動実践報告集「架け橋——私たちにできること」

震災からの3年間、本学の学生は数多くの教育機関に出向き、復興のためのボランティアに携わってきた。それらの活動の様子の足跡を、学生が中心となって編集したものである。

内容は、9つの団体の活動の様子、11名の学生のボランティア体験、また学生を受け入れてくれた教育委員会や学校関係者からの執筆等で構成されている。



4 教育復興支援センター「紀要」

教育復興支援センターでは研究開発部門の充実を図り、センター教員をはじめ本学教員や、教員と共同研究する学生などによる教育復興、防災などに関連した論文や実践報告を掲載した「紀要」を刊行している。

東日本大震災の被害を受けた学校の被災調査、被災地の子どもの健康に関する調査などの学術論文をはじめ、各種ボランティア活動に関する調査や実践研究の報告などが収録されている。

1 瀬尾 和大

津波災害と学校

—東日本大震災時の津波避難行動から学んだこと—

Tsunami and Schools - What We Learned from Evacuation Behaviors during the 3.11 Tsunami -

Kazuoh SEO

要約：本報は、東日本大震災の津波被災地域におけるいくつかの小中学校に着目し、津波に対する避難行動がどのように行われたか、また避難行動がどのように行われるべきだったのか、についての若干の考察を試みたものである。東日本大震災での事例を調べてみると、ほとんどの学校において津波災害から児童生徒を守るための最善の努力が試みられたことについては疑いの余地はないものの、結果的に避難行動がうまくできた学校とそうでなかった学校とが生じてしまったことは事実であろう。社会一般からすれば、このような避難行動がうまくできた学校とそうでなかった学校とでは、評価の



され方に大きな違いが現われるかもしれないが、実際には、両者の間にはそれほど大きな違いはなく、その差は紙一重だったのかも知れない。

本報では、結果の評価を行うことが目的ではなく、学校を中心とした地域の避難行動についての多くの事例から、今後の参考となる教訓を学びとることを目的としている。ここで得られた教訓の第一は、今回の津波災害における避難行動の巧拙が、事前の防災教育や避難訓練の実施状況と密接に関係していると思われる点である。的確な避難行動を行うためには、何よりも綿密な事前計画が必要であり、避難路は事前に準備しておき、なおかつ繰り返し実地訓練を重ねておくことが肝要である。教訓の第二は、災害発生時における学校の教職員には判断力（緊急を要する場合は多いので決断力と言ってもよい）が求められる点である。避難行動に際しては学内に留まるべきか、それとも学外に避難するべきかという重要な決断を迫られ、学校の教職員にも防災の専門家並みの見識が求められる。将来的にはそのための教育支援が必要になるものと考えられるが、当面の津波対策としては、無駄になることを恐れず、安全側の避難場所を選択する以外に方法はないものと考えられる。すなわち、広大な平野においては3階建て、もしくは4階建ての学校校舎であれば屋上避難を、海岸地形の複雑な三陸リアス海岸においては、何よりも近隣の高台（できれば退路を断たれる心配のない高台）への避難が望まれる。

キーワード：東日本大震災、津波災害、学校、避難行動、海岸平野、三陸リアス海岸

2 小田 隆史

東日本大震災における学校の経験と教訓の継承 グローバルな防災主流化へのローカルな実践
Amidst Global Disaster Risk Reduction Mainstreaming, Practices from the Field:
Sharing Lessons from post 3.11 Schools in Northeastern Japan Oda TAKASHI

要約：東日本大震災から得られた経験と教訓は、その広域性や多様性により多岐にわたる。これらの継承の必要性が叫ばれる中、「非収奪型」の復興支援に資する研究を通じて、被災地だけではなく国内外にわかりやすく伝えていく重要性を自覚し、研究を蓄積していくことも調査研究に携わる者の責務である。

本稿は、筆者が所属する宮城教育大学教育復興支援センターのこれまでの取組や刊行物を取り上げながら、学校の拠点性を再認識し、避難所・教育現場としての学校施設や教職員の役割を整理・分析して発信していく意義について報告する。

こうして蓄積されつつある事例を、国際社会における防災の主流化促進が叫ばれる今日、グローバルな場で発信し、それぞれの現場での実践につなげられる配慮をもってこそ、経験と教訓の継承が達成できたと言える。それこそが、収奪的学術調査に終始しないための第一歩であり、あの災禍にのまれた犠牲者やいまだ苦難の日々を過ごす被災者に報いるために学界が取組むべき実践のひとつでもある。

キーワード：学校、避難所、拠点性、東日本大震災

3 黒川 修行・佐藤 洋

東日本大震災後の仙台市小学6年生の体格の変化について（平成22年度～平成24年度まで）
Change of body physique among school children in Sendai, Japan after the Great

East Japan Earthquake

要約：2011（平成23）年3月に発生した東北地方太平洋沖地震によってもたらされた東日本大震災は子どもたちの生活環境に大きな変化をもたらした。このことは子どもたちの発育に影響を及ぼしていると考えられることができる。本報告では仙台市内の小学6年生の体格について、現在どのような状況にあるのか、明らかにすることを目的とした。平成22年度から平成24年度について比較すると、顕著な違いは認められなかった。しかしながら、平成24年度の肥満傾向児の出現率は、平成22年度および平成23年度に比し、増加することが観察された。このことが東日本大震災による生活環境等の変化による可能性も考えられるが、軽微な増加であったことから、今後のさらなる観察が必要であると考えられた。

キーワード：児童、身長、体重、東日本大震災

4岡 正明

津波被害地域の小学校支援を想定した代表的教材植物の耐塩性評価

Evaluation of Salinity Tolerance in Plants as Teaching Materials for Elementary School at Tsunami Disaster Area

Masaaki OKA

要約：津波被害を受けた小学校栽培教育への支援を目的に、研究情報が少なかった11種の代表的教材植物の耐塩性を評価する実験を行った。0.0%、0.1%、0.3%、0.5%、3.4%（海水濃度）となるよう食塩を溶かした水溶液を、約2ヶ月間に亘り、植物ポットに灌水した。各塩濃度区の地上部乾物重を調査した結果、耐塩性が強い植物としてマツバボタンが、やや強としてケイトウとヒャクニチソウが見出された。一方、茎が長く伸びるアサガオとヘチマは、低濃度であっても塩ストレスの影響が顕著に現れる植物であった。

キーワード：栽培教育、教材植物、耐塩性、津波被害、学校支援

5水谷 好成

光のインテリア工作による復興支援活動

Workshop of Interior Lighting with LED for Reconstruction Assistance

MIZUTANI Yoshinari

要約：自らが何かを創る「ものづくり体験教室」は、受動的に与えられるだけの支援活動ではなく、主体的な活動へとつながる教育面からの復興支援にならないだろうか。東日本大震災以後のエネルギー不足によって、省エネルギー照明であるLEDがさらに注目されている。そのような中、フルカラーイルミネーションLEDを光源にした「光のインテリア」を工作する教室を石ノ森萬画館（石巻）で企画・実施した。参加者の年齢制限を設けず、幼児（親子）からご高齢の夫婦まで幅広い年齢層の方が参加した。講師と学生スタッフによる対面型の教室として実施することで、工作に不慣れな参加者でもオリジナルのLEDインテリアを完成させることができた。適切な指導さえあれば、できそうもないこときりようになる。また色々な物を作りたくなるような次回の工作を期待させる教室が実施できた。

キーワード：エネルギー不足、LED（発光ダイオード）、灯り、ものづくり、癒し

6 西城 潔・目黒 李歩・鹿野 愛里加・福田 はる香

津波被災校への環境教育支援—仙台市立中野小学校の炭焼き体験—

Support for reconstruction of environmental education in school damaged by the 2011 Tohoku Earthquake Tsunami

KIYOSHI SAIJO, RIHO MEGURO, ARIKA KANO and HARUKA FUKUDA

要約：東日本大震災により環境教育の実施ができなくなった仙台市立中野小学校の3年次児童を対象に、宮城教育大学の「炭やき広場」を活用して、炭焼き体験の機会を提供した。実施日は2013年11月1日で、児童は大学側スタッフとともに炭焼き・焼イモ・焼マシュマロ・花炭づくりなどの活動に取り組んだ。限られた時間ではあったものの、参加児童には、火を扱う活動の楽しさ・難しさ・怖さなどを体験してもらうことができた。被災校の教育復興のため、今後もこのような機会を提供していきたい。

7 門脇 啓一・吉田 利弘・伊藤 芳郎

教育復興支援センター活動報告

学習支援ボランティア活動等を通じた学生の育成

Training students through volunteer activities

Keiichi KADOWAKI, Toshihiro YOSHIDA and Yoshiro ITO

要約：本稿は、教育復興支援センターの取組、主として支援実践部門、平成25年4月～26年1月の取組を報告する。本センターは、平成23年3月11日の東日本大震災によって甚大な被害を受けた宮城県内の学校教育の復旧・復興——児童生徒の確かな学力の定着・向上、現職教員の各種支援等を期して、同年6月28日に設置された。被災から3年目を迎えた25年度、センター支援実践部門においては人的・物的、二つの「充実」が図られた。

人的充実とは、ボランティア協力員を中心とする学生組織が、本格的に機能しはじめたことである。また、物的充実とは、6月29日のセンター棟の竣工である。研究室、会議室等の整備に加え、学生のミーティングルームが設けられた。そこを活動拠点として、各ボランティア団体の活動を担ってきた学生が、それぞれの活動内容、課題等について共通理解を図り、学生提案により大学祭、被災地視察研修、各種研修会が企画・運営された。そうした学生の主体性が、長期休業中の学習支援等のボランティア活動に好影響を与えることにもなり、前年度を上回る充実した支援活動が展開された。

支援実践部門を担う教職員としては、支援対象の児童生徒の成長に止まらず、支援する学生の人間の成長を期してきた。それが、以下に示すような学生たちのさまざまな実践により、身近に感じることができたのは望外の喜びであった。今後は各ボランティア活動の学生代表と協働して、その後継者の育成に努めたいと考えている。

なお、新しい試みとして仙台市立中野小学校、丸森町教育委員会の学び支援の具体の取組を掲載した。これを参照され、詳述できなかった各学校、各教委の取組も類推していただきたいと考えている。

キーワード：使命、支援、育成、自主性

8 小田 隆史、四ノ宮 誠也、木村 充希、吉田 絵里奈、伊藤 勇馬、佐藤 武文、橋本 一輝

大学生のボランティア参加に関する意識

宮城教育大学教育復興支援ボランティア協力員アンケート調査の結果から

Post 3.11 Japan Disaster Volunteerism Consciousness among University Students: Results from a 2013 M.U.E. Student Survey

Takashi ODA, Seiya SHINOMIYA, Mitsuki KIMURA, Erina YOSHIDA, Yuma ITO, Takefumi SATO, Kazuki HASHIMOTO

要約:2013年6月に、宮城教育大学教育復興支援ボランティア協力員アンケート調査班が実施した、大学生のボランティア参加の実態と意識に関する調査の分析を報告し、そこから見えてくる、ボランティア参加のあり方や実施・周知宣伝方法の課題などについて考察する。

キーワード：学習支援、ボランティア、東日本大震災、大学生



踏み出そう！子どもたちの笑顔のために

あすへ向けての軌跡 震災から3年を経て

VI

外部資金等の獲得

本学が被災地仙台にあり教員養成教育に責任を負う大学として、東日本大震災により甚大な被害をこうむった被災地域への中・長期的な教育的支援を重点的に取り組むため、各種外部資金獲得の申請を行った。

平成23年度から、文部科学省の競争的資金「大学改革推進等補助金（大学等における地域復興のためのセンター的機能整備事業）」、一般社団法人国立大学協会「震災復興・日本再生支援事業」の申請が認められ、公益社団法人日本ユネスコ協会連盟が実施する「被災地の教育復興支援事業『心に笑顔』プロジェクト」の協力（事業費の支援）が得られた。

平成25年度新たに文部科学省「学びを通じた被災地の地域コミュニティ再生支援事業」、復興庁「『新しい東北』先導モデル事業」への申請が採択された。また、公益財団法人上廣倫理財団からの助成も得られた。

1 文部科学省大学改革推進等補助金

大学等における地域復興のためのセンター的機能整備事業

補助金額：66,994千円

事業の目的・必要性

1) 全体

平成23年3月11日に発生した東日本大震災により、宮城県は生活全般にわたり極めて甚大な被害をこうむり、被災地では未だ避難生活も続いている状況である。しかし、震災からの本格的な復興に向けて自治体を中心に様々な活動が動き出している中、被災地仙台にあり教員養成教育に責任を負う大学として、被災地への中・長期的な教育的支援を重点的に取り組むため、その中核的な学内組織「宮城教育大学教育復興支援センター」を立ち上げ、宮城県教育委員会及び仙台市教育委員会との連携のもと、宮城県の教育の復興、発展をめざすとともに、地域に密着した現職教員支援及び教員養成実践教育を行うものである。

被災地の学校では、授業再開によって明らかになった事実関係が明確化しており、学力低下・学力格差が懸念されている。

- ①教室復旧過程における児童・生徒の学習意欲・態度、集中力、学習達成度における課題の明確化
- ②避難所生活や仮設住宅生活等の家庭環境の変化が与える子どもへの影響
- ③転校を余儀なくされ、離ればなれになった児童・生徒の心的ストレス
- ④家族を失った児童・生徒の癒されない気持ちの潜在化

しかしながら、これら困難な諸課題に向き合っている教職員は疲労が蓄積しており、日々進行す

る被災の現状認識に伴う心的ストレスの増加、問題をもった児童・生徒に対する心のケアを含む教育の方法に関する知識不足などから、適切な教育環境が確保されておらず、教育復興への大きな障壁となっている上、これらは短期間で解決できる課題ではないものである。本学が被災地域の一日も早い復興のためにできることを考えたとき、中・長期的な教育的支援という視点に基づいた本事業を実施することにより、宮城県の教育復興を図る取組の一つとして寄与するものである。さらに、教員をめざす学生が被災地域に赴き、困難な生活に立ち向かう児童・生徒や教職員と触れ合いながら勉学を教えたり教育活動に携わることは、今後の教員生活に必須となる人間力や教育実践力の向上のための貴重な財産となり得るものである。

2) 平成 25 年度

専任の特任教員 2 名が配置され被災地域における教育問題の実態把握と分析を行い、支援方法や実施体制の在り方についての研究を開始している。また、宮城県教育委員会及び仙台市教育委員会と連携しながら被災地の学校のニーズの把握に努め、要請のあった被災地域の各学校に本学学生や連携している他大学学生を派遣し、児童・生徒の個別学習指導や教員補助にあたる支援活動を前年度に引き続き実施する。さらに、震災復興や防災教育に関わるセミナー、心のケアに関する相談や講習会、実験工作教室等のイベント的实践授業を実施し、被災地の学校現場への支援を充実させる。

2 一般社団法人国立大学協会

平成25年度震災復興・日本再生支援事業

補助金額:1,000千円

補助事業の趣旨・目的（被災自治体からの要望内容を含む）

被災地の学校では、仮設住宅生活や転校を余儀なくされる等、家庭・教育環境の大きな変化や、家族や友だちを失った癒されない心的ストレス等によって起因される、児童・生徒の中・長期的な学習意欲の低下・学力格差が懸念されている。

また、被災した児童・生徒に対応する側の教員も自らが被災者であるため疲労や心的ストレスが蓄積している上、被災した児童・生徒への心のケアや教育方法については、知識・経験不足も影響し、適切な教育環境が確保されておらず、教育復興への大きな障壁となっている。

このため本学では、甚大な被害をこうむった宮城県の教育の復興に向け、平成 23 年 6 月、教育復興支援センターを設置し、宮城県教育委員会及び仙台市教育委員会との連携のもと、県内の国公立大学及び国立教員養成系大学・学部と連携しながら、県内の児童・生徒の確かな学力の定着・向上及び現職教員の支援を中・長期的視点に立って実施するものである。

平成 23 年度においては、学力低下・学力格差に対応するため、被災地区の学校現場や教育委員会から支援要請のあった各学校へ学生を派遣して、長期休業期間や土日を活用した学習支援や補習授業を行う、「宮城教育大学教育復興支援塾事業」を実施した。

平成 24 ~ 25 年度は、学生派遣が集中する長期休業期間の調整にあたって、被災地の学校や教育委

員会、連携している他大学との緊密な連絡調整を図る。さらに、本事業の支援プログラムについての広報を積極的に行い、これまで本事業を活用していない学校の参加を促す。また、ボランティア活動に際しては、自己健康管理や、被災地の児童・生徒の気持ちに配慮した行動をすることが重要となるので、より質の高いボランティア活動ができるよう学生派遣前における研修を実施し工夫・改善を図るとともに、ボランティア参加学生の量的拡充も図っている。

3 被災地の教育復興支援事業「心に笑顔」プロジェクト

公益社団法人日本ユネスコ協会連盟が実施する「被災地の教育復興支援事業『心に笑顔』プロジェクト」の協力（事業費の支援）先の一つとして、本学が行う教育復興支援事業が選ばれ、活動資金として助成金が寄附された。

寄附金額:3,132千円

事業の趣旨・目的

「心に笑顔」プロジェクトとは、UNESCO がドイツの化学会社 BASF の寄附を受けて実施する事業で、被災地の教育復興に協力するものである。

BASF の支援によって実現する「心に笑顔」プロジェクトは、被災地の教育復興という課題に対し、自治体の教育復興計画に沿い、ストレスの多い生活の中で子どもたちや市民が笑顔を取り戻せる機会を提供し、震災体験の共有化により、持続可能な未来に向けた防災教育を推進していくことを目的とするものである。事業は次の8つの活動で構成されている。

①学習支援活動、②遊具・スポーツ用具支援活動、③安全な遊び場支援活動、④心のケアを考慮した実験・工作教室支援活動、⑤心のケアを考慮した市民向け文化活動（コンサートや講演などの開催）支援、⑥子どもキャンプ、⑦学校の震災経験の共有化、⑧市民の震災体験の共有化

本学には、①学習支援活動の一つとして、宮城県内の被災地の子どもたちを対象に、大学生による学習支援ボランティア活動を通じて、長期休業中の学習支援を行うことを目的に助成された。

本寄附金の具体的な使途は、学生ボランティアの移動費用（バス借上げ代など）、活動先での食事代、ボランティア学生活動支援金（500円～1,500円／1日当たり）等に活用されたものであり、3年目を迎えた本学教育復興支援センターにおける学生ボランティア活動を大きく支えるものとなった。



4 文部科学省「学びを通じた被災地の地域コミュニティ再生支援事業」

受託金額:33,812千円

事業の趣旨

東日本大震災から3年が過ぎ、復興が進む一方で先が見えがたい現実に、仮設住宅や見なし仮設住宅に疲労感や焦燥感が広がってきており、地域コミュニティの再生・復興がままならない中、被災直後とは変化した地域課題が生じてきている。本事業は、そういった課題への対応策を一過性のものとせず、今後の被災地の自律的な復興が長く地域コミュニティに根ざす仕組みづくりを実現するため、産・官・学が連携して以下の事業に取り組むこととした。

- ・地域における活動を担う人材の育成
- ・人と人とのつながりを再生する学びの事業の推進
- ・学校と地域とが協働で取り組む防災教育の創造と実践
- ・コミュニティ再生を支える地域連携組織の構築



具体的な取り組み内容

広く地域一般市民に防災や復興に関する多種多様な講座を提供した「宮教大防災 week」や、震災復興と自分の進路について考える機会を提供した高校生キャリア講座「考えよう！しごと・復興・私の未来」、仙台市内協力小・中学校で実践した防災教育授業や、自分の地域コミュニティを知る機会をとすまち歩きや商店街歩き等のイベントを実施した。

5 復興庁「新しい東北」先導モデル事業

楽しみながら生きる力が身につく教育環境整備事業

受託金額:8,874千円

事業の趣旨

女川町を中心とする宮城県沿岸部は平地が少なく、本来、子どもの遊び場となる公園や校庭等に仮設住宅が設置されるなど、野外での子どもの遊び場が圧倒的に不足している。学校の統廃合や学区外の仮設校舎への通学のため、遠方からのスクールバスの登下校を強いられる児童が多いことから、体を動かす機会が極端に減少しており、体力低下や心身の発育への悪影響が懸念される。将来を担う子どもたちが健やかに成長できるよう、行政・町民・大学等教育関係者が一体となって基礎的生活習慣の改善を通じて、子どもたちの生きる力の向上と育成環境の整備を進めていく必要がある。



具体的な取り組み内容

専門家や有識者による「教育・人づくり構想会議」を実施し、今までの実践活動や研究成果を基に、子どもの成育時間の健全化を図るための仕掛けづくりを行政に提案。子供の遊び場づくりとして、週1～2回程度、本学教職員と学生スタッフがプレイリーダーとして、児童や高齢者も含めた地域住民に子どもの集団遊び方法が根づくよう運動支援を実施。

6 公益財団法人上廣倫理財団

プロジェクト研究助成〈p4cせんだい推進プロジェクト〉

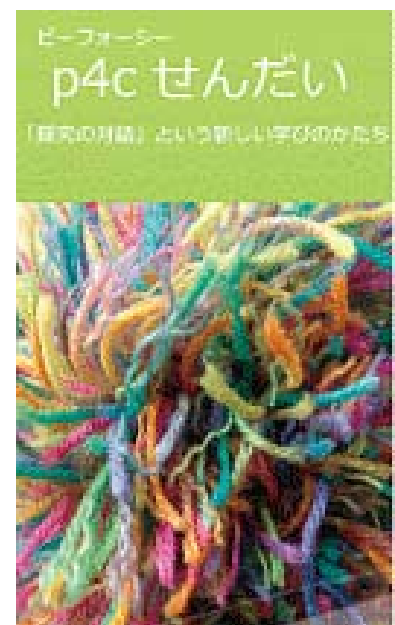
寄附金額:1,712千円

事業の概要

人間の倫理観の育成・教育に関わる研究及び活動への助成を行っている当該財団より、被災地における「命の教育」「生き方教育」に寄与するp4c（philosophy for children: 子どもの哲学）推進への支援をいただいた。大学研究者、学校、企業人など幅広い委員で構成した実行委員会を核に、研究、実践を積み重ねてきた。

震災により発生した家庭や地域環境の激変は、児童生徒の学習意欲の低下や心的ストレス、体力低下など大きな課題をもたらしただけでなく、人生観や価値観を大きく揺るがす状況を生み出した。復旧復興の過程において、さらに根源的な問題が発生してくることが予見されるが、その解決へ導くプログラムとしてp4cのプログラムに着目し、下記のような研修・実践・研究の活動を行うこととした。

従来の大学と教育委員会、学校との連携に留まらず、広く地域や企業なども巻き込んで、児童生徒の考える力やコミュニケーション力、想像力の高揚をめざす取り組みを展開する。またその成果を学生及び地域にも波及させ、p4cが教育復興の一翼を担えるよう強力に推進する。活動を開始したのは平成25年8月であるが、短期間に実践が広がったことを財団が高く評価し、助成が実現した。





踏み出そう！子どもたちの笑顔のために

あすへ向けての軌跡 震災から3年を経て

VII

資料

1 平成25年度 教育復興支援センター活動（事業）実績一覧

	日程	実施場所・学校名等	実施内容	派遣実人数 (他大学内数)	派遣延人数 (他大学内数)	協力・連携団体	備考
1	4月～継続 (年間)	仙台市立中野小学校	教員補助	26			②教員補助事業
2	4月～継続 (年間)	仙台市立荒浜小学校	教員補助	2			②教員補助事業
3	4月～継続 (年間)	岩沼市立玉浦小学校	教員補助	1			②教員補助事業
4	4月～継続 (年間)	仙台市立七郷中学校	教員補助	1			②教員補助事業
5	4月18日	宮城教育大学	第3回復興カフェ「宮古市田老地区の現状について」	26			研究開発事業
6	4月19日	宮城教育大学	ボランティア協力員準備会	6			人材育成
7	4月24日	宮城教育大学	第1回 ボランティア総会	101			人材育成
8	4月25日	宮城教育大学	iPad講習会	9			人材育成
9	4月30日	宮城教育大学	第1回ボランティア定例会	26			人材育成
10	5月1日	宮城教育大学	第2回ボランティア定例会	21			人材育成
11	5月10日	文部科学省	「地域と協働する大学づくりシンポジウム」パネル出展				その他
12	5月11日	南三陸町立戸倉小学校 他	第8回被災地視察研修	36			人材育成
13	5月13日	宮城教育大学	第3回ボランティア定例会	24			人材育成
14	5月15日	宮城教育大学	河北新報社講習会 事前勉強会	8			人材育成
15	5月22日	宮城県立石巻支援学校	運動会の準備・運営補助、児童生徒への活動補助	1	1		②教員補助事業
16	5月22日	仙台市立荒浜小学校	運動会の準備・運営補助、児童生徒への活動補助	20	20		②教員補助事業
17	5月26日	南三陸町立戸倉小学校 他	第9回被災地視察研修	34			人材育成
18	5月29日	宮城教育大学	第1回ボランティア新聞を作ろう講習会	26			人材育成
19	5月29日	宮城教育大学	第4回復興カフェ「未来へ継ぐ」	36			研究開発事業
20	6月8日	仙台市農業園芸センター (仙台市科学博物館)	こども☆ひかりフェスティバルの補助(※仙台市科学博物館より依頼)	23			④こども対象・参加イベント事業
21	6月10日	宮城教育大学	第5回復興カフェ「フィリピンの自然災害と防災教育」	20			研究開発事業
22	6月12日	宮城教育大学	iPad講習会	11			人材育成
23	6月15日	岩沼市陸上競技場	岩沼市中総体(陸上競技)の実施・運営の補助	8	8		②教員補助事業
24	6月15日	南三陸町立戸倉小学校 他	第10回被災地視察研修	34			人材育成
25	6月16日	南三陸町立戸倉小学校 他	第11回被災地視察研修	22			人材育成
26	6月19日	大和町立鶴巣小学校	総合学習における体験学習での指導支援	15			④こども対象・参加イベント事業
27	6月26日	宮城教育大学	第2回ボランティア新聞を作ろう講習会	10			人材育成
28	6月26日	宮城教育大学	第6回復興カフェ「震災を忘れないために～学生からのメッセージ」	60			研究開発事業

	日程	実施場所・学校名等	実施内容	派遣実人数 (他大学内数)		派遣延人数 (他大学内数)		協力・連携団体	備考
29	6月26日	石巻市鹿妻地区	「鹿妻復興マップづくり」	4				東北大学災害科学国際研究所	研究開発事業
30	6月29日	仙台国際センター	教育復興支援センター棟竣工記念シンポジウム「学びの力が未来を拓く」	主催		110			③教員研修等事業
31	7月1日	宮城教育大学	仙台市立中野小学校「ヤギふれあい体験活動の実施」	主催		13			④こども対象・参加イベント事業
32	7月6日	仙台市旭丘市民センター	佐藤静教授、野澤令照副センター長／公開研究会「不登校・適応支援の原点」	協力		120			⑤心のケア支援事業
33	7月10日	石巻市鹿妻地区	「鹿妻復興マップづくり」	5				東北大学災害科学国際研究所	研究開発事業
34	7月17日	宮城教育大学	学習支援ボランティア壮行式・不安解消会	50					人材育成
35	7月22日	美里町教育委員会	「美里町学び支援事業研修会」講師			20			③教員研修等事業
36	7/22～7/26	女川町立女川小学校	自学自習支援	4	(1)	8	(3)	東北大学	①教育復興支援塾事業
37	7/22～8/23	柴田町内4小・中学校	自学自習支援(槻木小学校、船迫小学校、船岡小学校、船岡中学校)	5		17			①教育復興支援塾事業
38	7/25～8/20	大河原町立大河原中学校	自学自習支援(数学・英語)	2		7			①教育復興支援塾事業
39	7/25～8/6	仙台市立七郷中学校	自学自習支援(5教科・主に中3年生)	10		10			①教育復興支援塾事業
40	7月26日	気仙沼市立階上小学校図書館	楽器作りワークショップ	12					④こども対象・参加イベント事業
41	7月26日	女川町総合体育館	女川町民を対象とした交流イベント	共催		20			④こども対象・参加イベント事業
42	7月29日	東松島市コミュニティセンター	東松島市教員研修会「志教育講演会」	主催		300			⑥こころざし・キャリア教育事業
43	7/30～8/5	巨理町立達隈中学校・荒浜中学校	自学自習支援(数学・英語、中3年生対象)	8		11			①教育復興支援塾事業
44	8/5～8/9	角田市内3小・中学校	自学自習支援(角田小学校、北角田中学校、角田中学校)	10	(1)	29	(5)	群馬大学	①教育復興支援塾事業
45	8/5～8/9	大崎市内3小・中学校	自学自習支援(小5・6年生及び中1～3年生対象)(古川第一小、古川中・古川南中)	17	(7)	67	(35)	愛知教育大学	①教育復興支援塾事業
46	8/5～8/9	気仙沼市内8中学校	自学自習支援(小3～6年生及び中1～3年生対象)	21	(5)	89	(25)	早稲田大学	①教育復興支援塾事業
47	8/5～8/9	大和町立大和中学校	自学自習支援(数学・英語、中1～3年生対象)	2		10			①教育復興支援塾事業
48	8/5～8/9	大和町立宮床中学校	自学自習支援(数学・英語、中1～3年生対象)	3		11			①教育復興支援塾事業
49	8/5～8/9	登米市立南方中学校	自学自習支援(主に中3対象)	11	(9)	52	(45)	京都教育大学	①教育復興支援塾事業
50	8/5～8/9	丸森町立丸森中学校	自学自習支援(5教科・中1～3年生対象)	9	(6)	44	(29)	奈良教育大学、北海道教育大学	①教育復興支援塾事業
51	8/5～8/9	名取市立開上中学校	自学自習支援(5教科・中1～3年生対象)	16	(8)	58	(35)	早稲田大学、仙台大学	①教育復興支援塾事業
52	8/5～8/9	登米市内小・中学校	自学自習支援(小3～6年生及び中1～3年生)	8	(8)	40	(40)	大阪教育大学	①教育復興支援塾事業
53	8/5～8/9	色麻町立色麻小学校①	自学自習支援(小3～6年生対象)	2		10			①教育復興支援塾事業
54	8/6～8/7	登米市立米山中学校	自学自習支援(数学・英語、中1～3年生対象)	5		10			①教育復興支援塾事業
55	8/6～8/9	仙台市立蒲町中学校①	自学自習支援(数学・英語、主に3年生対象)	3		7			①教育復興支援塾事業
56	8/7～8/9	石巻市内小・中学校	自学自習支援(小3～6年生及び中1～3年生)	1		3			①教育復興支援塾事業
57	8/7～8/9	一関市立萩荘中学校	自学自習支援(数学・英語・国語)	2		6			①教育復興支援塾事業
58	8/7～8/11	美里町立小牛田中学校	自学自習支援(小3～6年生及び中1～3年生)	3		5			①教育復興支援塾事業

東日本大震災

	日程	実施場所・学校名等	実施内容	派遣実人数 (他大学内数)	派遣延人数 (他大学内数)	協力・連携団体	備考
59	8/8～8/12	美里町立不動堂中学校	自学自習支援(小3～6年生及び中1～3年生)	3	4		①教育復興支援塾事業
60	8/10～8/12	明成高校	学習支援(小論文・英語・数学)	3	5		①教育復興支援塾事業
61	8/16～8/20	栗原市立築館中学校	「学府くりはら塾」での講師(3教科、教材作成・指導を含む)	19	73		①教育復興支援塾事業
62	8/19～8/21	仙台市立蒲町中学校②	自学自習支援(数学・英語、主に3年生対象)	8	(3) 21	(9) 東北学院大学	①教育復興支援塾事業
63	8/19～8/21	石巻市立北上小学校①	図書整理	5	(2) 14	(8) 東北学院大学	②教員補助事業
64	8/19～8/22	南三陸町立戸倉小学校	自学自習支援(全学年)	9	(1) 32	(3) 東北学院大学	①教育復興支援塾事業
65	8/19～8/22	宮城県黒川高校	サマースクール講師(国語・数学・英語、主に2年生)	2	8		①教育復興支援塾事業
66	8/19～8/23	色麻町立色麻小学校②	自学自習支援(小3～6年生対象)	9	21		①教育復興支援塾事業
67	8/19～8/23	色麻町立色麻中学校	自学自習支援(中1～3年生対象)	9	21		①教育復興支援塾事業
68	8/19～8/23	大郷町立大郷小・中学校	サマースクール講師・自学自習支援	12	40		①教育復興支援塾事業
69	8/19～8/23	女川町立女川中学校	自学自習支援(中1～3年生対象)	7	(5) 31	(25) 福岡教育大学	①教育復興支援塾事業
70	8/19～8/23	塩釜市内4中学校	自学自習支援(中1～3年生対象)	14	(9) 57	(45) 東京学芸大学	①教育復興支援塾事業
71	8/19～8/23	南三陸町立志津川中学校	自学自習支援・部活動支援	15	(10) 74	(50) 上越教育大学、愛知教育大学	②教員補助事業
72	8月20日	岩沼事務所	岩沼市教育委員会との地域連携被災地研修講演会	17			その他
73	8/20～8/22	岩沼市中央公民館(仮設住宅入居小・中学生)	自学自習支援(仮設に入居している児童、生徒対象)	4	11		①教育復興支援塾事業
74	8/20～8/22	岩沼市立玉浦小学校	自学自習支援	7	(3) 19	(9) 北海道教育大学	①教育復興支援塾事業
75	8/21～8/23	栗原市金成庁舎	小学校版「学府くりはら塾」・自学自習支援(国語・算数、小3～6年生)	12	31		①教育復興支援塾事業
76	9/11～9/14	福島県会津若松市(大熊町幼稚園・小・中学校)	教員補助	23	92		②教員補助事業
77	9月14日	同志社大学	「第10回全国大学コンソーシアム研究交流フォーラム」パネル出展				その他
78	9月15日	気仙沼市本吉公民館	スペースラポin気仙沼として、気仙沼市小学生を対象とした実験工作教室	主催	22		④こども対象・参加イベント事業
79	9月19日	宮城教育大学	第7回復興カフェ「持続し復元力ある地域をつくるコミュニティの物語」	40			研究開発事業
80	9/24～9/27	丸森町内5小学校	教員補助	20	(11) 77	(44) 奈良教育大学	②教員補助事業
81	9/27～9/29	女川・石巻・荒浜地区・宮城教育大学	沖縄県立芸術大学被災地視察、教育復興ワークショップの開催	主催	30		④こども対象・参加イベント事業
82	10月～継続(年間)	明成高校	教員補助(土曜日の学習支援)	1			②教員補助事業
83	10月5日	石巻市立北上小学校②	図書整理	5	(3) 5	(3) 東北学院大学	②教員補助事業
84	10月12日	東北歴史博物館	仮設住宅の児童を対象とした秋の博物館イベント運営補助	4			④こども対象・参加イベント事業
85	10/13～17	宮城教育大学・岩沼市立玉浦中学校 他	IIDEA(タイ教育省国際教職員開発研究所)被災地視察研修等				その他
86	10月14日	気仙沼市立向洋高校 他	第12回被災地視察研修	33			人材育成
87	10月17日	宮城県宮城野高等学校	「チャレスポ!宮城野!」運営補助(※仙台市立中野小学校の依頼による)	3			④こども対象・参加イベント事業
88	10月18日	宮城教育大学	第2回ユネスコスクール東北大会/第3回ユネスコスクール宮城県大会へのパネリスト出演				その他
89	10月26日	宮城教育大学	ボランティア報告会	50			その他
90	10月27日	宮城教育大学	フォーラム「震災時の学校現場とこれからの防災教育」	50			その他

	日程	実施場所・学校名等	実施内容	派遣実人数 (他大学内数)	派遣延人数 (他大学内数)	協力・連携団体	備考
91	10月31日	宮城教育大学	第8回復興カフェ「台風26号による伊豆大島における災害と支援」	17			研究開発事業
92	11/1～11/2	気仙沼市・陸前高田市 他	気仙沼市教育委員会・お茶の水女子大学・教育復興支援センター連携事業			お茶ノ水女子大学	その他
93	11月2日	宮城県立石巻支援学校	学校祭の準備・運営補助、児童生徒への活動補助	7	7		②教員補助事業
94	11月9日	仙台市立東六郷小学校	音楽イベントの運営補助	6			④こども対象・参加イベント事業
95	11/19、22	七ヶ浜町中央公民館	七ヶ浜町内小・中学生の不登校支援	2	2		②教員補助事業
96	11月20日	宮城教育大学	第9回復興カフェ「フィリピン台風30号—私たちにできる恩返しを考えたい—」	38			研究開発事業
97	11月23日	石ノ森漫画館	本学技術教育講座主催のクリスマス工作イベントへの協力	協力	30		④こども対象・参加イベント事業
98	11月25日	宮城教育大学	第1回 HP作成講習会	3			人材育成
99	11月26日	仙台市立寺岡小学校	公開研究会コーディネーター	主催	350		③教員研修等事業
100	11月28日	宮城教育大学	第2回 HP作成講習会	5			人材育成
101	11月30日	登米市内応急仮設住宅	仮設住宅住民を対象とした天文イベント	9			④こども対象・参加イベント事業
102	12月1日	仙台市天文台	スペースラボと題した実験工作教室	主催	15		④こども対象・参加イベント事業
103	12月6日	宮城教育大学	第3回 HP作成講習会	5			人材育成
104	12月7日	気仙沼市階上中学校仮設住宅集会所	仮設住宅に住む親子を対象とした「お菓子の家作り教室」	13			④こども対象・参加イベント事業
105	12月8日	仙台情報・産業プラザ(AER)	南東北3大学連携「災害復興学」市民講座「東北の未来創りと大学の使命」	80			③教員研修等事業
106	12月7日	南相馬市 他	第13回被災地視察研修	38			人材育成
107	12月11日	石巻市鹿妻地区	「鹿妻復興マップづくり」発表会	3			研究開発事業
108	12月12日	宮城教育大学	第4回 HP作成講習会	4			人材育成
109	12月14日	石ノ森漫画館	本学技術教育講座主催のクリスマス工作イベントへの協力	協力	30		④こども対象・参加イベント事業
110	12/14～15	仙台市・名取市・気仙沼市	お茶大附属高校ボランティア部との被災地視察研修	4			その他
111	12月15日	気仙沼市総合体育館	気仙沼市での小学生・親子を対象とした運動支援イベント	協力	100		④こども対象・参加イベント事業
112	12月15日	気仙沼市立向洋高校 他	第14回被災地視察研修	13			人材育成
113	12月20日	宮城教育大学	第5回 HP作成講習会	4			人材育成
114	12/22～23	蔵王町ございんホール	蔵王町冬の学習会(自学習支援、数学・英語、中1～中3対象)	1	2		①教育復興支援塾事業
115	12/22～23	AER	こども☆ひかりミュージアムストリートの運営補助(※仙台市科学博物館より依頼)	5			④こども対象・参加イベント事業
116	12/23～25	栗原市金成庁舎	「冬の学府くりはら塾」での講師(中3受験生対象・3教科、教材作成・指導を含む)	6	10		①教育復興支援塾事業
117	12月24日	大郷町教育委員会	「大郷町立小・中学校教員研修会」講師		42		③教員研修等事業
118	12/24～26	塩釜市内2小学校	自学習支援(国語・算数・数学、小3～6年生及び中1～中3対象)	3	6		①教育復興支援塾事業
119	12/25～26	大和町立大和中学校	自学習支援(数学・英語、中1～3年生対象)	2	4		①教育復興支援塾事業
120	12/25～26	大和町立宮床中学校	自学習支援(数学・英語、中1～3年生対象)	5	7		①教育復興支援塾事業

	日程	実施場所・学校名等	実施内容	派遣実人数 (他大学内数)		派遣延人数 (他大学内数)		協力・連携団体	備考
121	12/25～27	気仙沼市内7中学校	自学自習支援(小3～6年生及び中1～3年生対象)	16	(11)	46	(33)	早稲田大学、東北学院大学、徳島大学	①教育復興支援塾事業
122	12/25～27	仙台市立蒲町中学校	自学自習支援(主に数学・英語、中1～中3対象)	5		12			①教育復興支援塾事業
123	12/25～27	亘理町立吉田中学校①	自学自習支援(主に数学・英語、中1～中3対象)	3		6			①教育復興支援塾事業
124	12/25～27	大郷町立大郷小学校	自学自習支援(国語・算数、小4～小6対象)	8		12			①教育復興支援塾事業
125	12/25～27	大崎市内3中学校	自学自習支援(中学生対象)	9		17			①教育復興支援塾事業
126	12/26～27	登米市立南方中学校	自学自習支援(全教科)	3		6			①教育復興支援塾事業
127	12/26～27	栗原市金成庁舎・栗原市文化会館	小学校版「学府くりはら塾」・自学自習支援(国語・算数、小3～6年生)	8		15			①教育復興支援塾事業
128	12月27日	美里町北浦コミュニティセンター	自学自習支援(北浦小学校児童対象)	2		2			①教育復興支援塾事業
129	1月～継続(年間)	仙台市立蒲町中学校	教員補助(放課後の学習支援)	1					②教員補助事業
130	1月9日	宮城教育大学	第6回 HP作成講習会	4					人材育成
131	1月15日	宮城教育大学	第2回ボランティア総会	52					人材育成
132	1/18～19	柴田町船岡公民館	自学自習支援(数・英、槻木中学校、船迫中学校、船岡中学校の3年対象)	3		7			①教育復興支援塾事業
133	1月20日	仙台市青年文化センター	佐藤静教授／不登校支援の「これまで」と支援の輪を広げた「これから」	共催		500			⑤心のケア支援事業
134	1月26日	聖ウルスラ学院英智小中学校・高等学校	本図教授、藤代特任教授、野澤副センター長／いのちの教育実践交流会in宮城「防災教育と心のケア」	共催		150			⑤心のケア支援事業
135	1月30日	宮城教育大学	第7回 HP作成講習会	6					人材育成
136	2月1日	仙台市青葉体育館	環境教育実践研究センター主催「国際教育から見える地域コミュニティ～震災後の東北から～」	共催		72			③教員研修等事業
137	2月8日	東北歴史博物館	仮設住宅の児童を対象とした冬の博物館イベント運営補助	5					④子ども対象・参加イベント事業
138	2月15日	気仙沼階上学童センター	学童保育での学習・遊び支援ボランティア	6					④子ども対象・参加イベント事業
139	2/16～2/21	福島県会津若松市(大熊町幼稚園・小・中学校)	教員補助	25		125			②教員補助事業
140	3月1日	仙台市シルバーセンター	震災から3年—これからの子どもたちの元気を支援するために—	主催		80			⑤心のケア支援事業
141	3月15日	仙台市立東六郷小学校	卒業式での音楽演奏ボランティア	4					④子ども対象・参加イベント事業
142	3月17日	宮城教育大学	第10回復興カフェ「地域おこしや過疎化対策などの地域活性化を対象とした、人材育成における大学と地域連携の役割」	13		13			研究開発事業
143	3月22日	仙台市立荒浜小学校	卒業式運営補助	4		4			②教員補助事業
144	3/24～3/28	南三陸町立志津川中学校	自学自習支援、部活動指導補助、環境整備等	12	(5)	60	(25)	愛知教育大学	②教員補助事業
145	3/25～3/28	気仙沼市内6中学校	自学自習支援(小3～小6、中1～中2対象)	12	(5)	48	(20)	奈良教育大学	①教育復興支援塾事業

2 教育復興支援センターだより

教育復興支援センターだより

④ タイ教育省教職開発研究所との連携(4月23日・火)

本学とタイ教育省教職開発研究所が防災教育プログラムの開発と実践に向けた国際交流協定締結に伴い、タイ王国教育省次官ほか一行が来日しました。本センター教員が名取～石巻訪問に同行し、宮城県総合教育センターで、防災教育のための教材開発について視察しました。また津波で被災した陸上の復興商店街や、津波の爪痕を確証出来る日和山を訪れ、地元校長先生から被災と復興の様子をうかがい、授業を体験しました。教育省次官は、防災教育の分野で情報交換や交流を通じて大災害への備えを学ぶなどの連携事業を進めたい意向を示しました。



⑤ ボランティア協力員 総会(4月24日・水)

昨年度からスタートしたボランティア協力員制度が2年目に入り、2年生になった協力員の呼びかけに応じた新1年生69名を含む約100名が出席しました。総会の進行は2年生連絡員が担当し、和やかな中に終了することができました。5月には協力員対象の「被災地視察研修」も予定されていて、ボランティア活動促進等、今後の活躍に期待が持たれます。



⑥ 第11回 iPad講習会(4月25日・木) & 新聞づくり講習会(5/29)のご案内

第11回目の講習会は、本センター業務教員の田端健人先生と研究室ゼミとして学生も参加し受講生は8名となりました。次回以降はiPadアプリの講習会を開催予定。また、河北新報社と協同の新聞づくり講習会を開催することを予定しています。



教育復興支援センターだより

⑥ グリーンウェア活動に参加(5月27日・月)

教育復興支援センター棟が完成したのを記念して、国連の生物多様性条約事務局が、5月22日の「国際生物多様性の日」に、世界各地の青少年の手で、それぞれの学校の敷地などに植樹を行うと、と呼びかけているグリーンウェア活動に参加し、四季咲きバラ4本(赤・白・黄色・ピンク)を植樹しました。



⑥ 第4回復興カフェ(5月29日・水)

気仙沼出身の本学学生部生・菊田真由さんに、震災体験や、その後の2年間を通して考えていた課題、「ボランティアに行きたいけど、何が出来るかわからない」という宮城大生へのメッセージなどについてお話しいただきました。今回も気仙沼事務所とTV会議システムを活用しましたが、当日は菊田真由さんのお母様が気仙沼事務所にて、真由さんの発表をご覧になっていました。



⑦ 第1回ボランティア新聞を作る講習会(5月29日・水)

ボランティアを行っている学生、いまからやりたい学生などを対象に、河北新報社の方々から、ボランティア新聞作成を通して、学級新聞や卒論に役立つノウハウを伝えていただきました。次回は6月26日(水)。



【今後の主な予定】

- ※第5回復興カフェ(6/10・月)
- ※第10回&11回被災地視察研修会(6/15・土 6/16・日)
- ※センター竣工式・シンポジウム(6/29・土)

① 第2回ボランティア活動報告会(3月16日・土)

場所 宮城教育大学 管理棟3階 中会議室 参加者 奈良教育大学学生・本学学生
参加学生の活動紹介後、今後の課題について話し合う時間を設けた。

今後の課題(参加学生より)

- ・教育復興支援センターの存在と役割を大学内外に広く知らせ、学生らが活用しやすい環境づくりをする。
- ・学生入研修会を行う等、サポート体制も充実させ、ボランティアへ参加しやすい環境も整えていきたい。
- ・大学内でも積極的かつ日常的になるべく報告会等を行い、学生たちに支援の輪を広げていきたい。
- ・ボランティアは、自分のことを自分で責任もってできることが大前提で、余力があってこそ充実した支援を行えるものである。なので、学生らがよりボランティアに参加できるような環境づくりを大学側にも支援して欲しいと思う。



② 仙台市博物館より「仙台平野の歴史地震と津波」パネル展覧

仙台市博物館より遺跡や史料に残る、主な地震災害の記録を時代順に見やすく表現された大変貴重なパネル(B1版・28枚)を頂きました。新センター棟へ展示し、本学の防災・復興教育や教員養成教育等の充実に向けて活用していきます。(4月12日御礼に伺いました。)



③ 第3回復興カフェ in Miyako (4月18日・木)

平成24年度より本センター特任教授(副センター長)に兼任の瀬尾大先生に、「宮古市田老地区の現状について」お話しいただきました。第2回に続き、今回も気仙沼事務所へTV会議にて配信しました。



瀬尾先生ご使用のワーポイント(PDFファイル)を下記アドレスから公開(学内のみ)しています。
<http://fukkou.miyako-u.ac.jp/local/cafe3.pdf>



教育復興支援センターだより

13号
13.5.14

教育復興支援センターだより

14号
13.6.6

① 地域と共創する大学づくりシンポジウム～地域と大学の更なる協働に向けて～(5月10日・金)

文部科学省では、地域と協創する大学づくりを目指し、平成23年度から全国18大学とともに熟議を開催しています。本学でも、許年度開催された「全国生涯学習ネットワークフォーラム2012」において、学びを通じた絆づくりと活力あるコミュニティ形成～一人一人にできること～をテーマに熟議を行いました。そして、これらの取り組みの集大成として5月10日(金)に「地域と協創する大学づくりシンポジウム」が開催され、全国の各大学における成果を報告・共有するとともに、大学と地域の更なる協働の在り方を議論し、本学はパネル展示を実施しました。



② 第8・9回被災地視察研修(5月11日・土、26日・日)

第8・9回は、南三陸町防災対策庁舎～戸倉小学校～石巻市立大川小学校を視察しました。参加者は、ボランティア協力員を中心に職員もきめ70名。戸倉小学校の麻生川教頭校長先生の話を聞きながら、実際に避難したルートを歩きました。また、ダンブカーの往来が激しい大川小学校を視察した学生からは、震災を風化させてはいけない、被害の程度が激しく、震災の経験者としてできることは、震災直後よりも増えている、などの感想がありました。



③ 第3回ボランティア協力員運営定例会(5月13日・月)

ボランティア協力員24名が出席し、第3回運営定例会が開かれました。ボランティア協力員の目的、活動内容、年間計画、係分担、担当分けなどを検討、1年生の代表が赤間仁美さんに決めました。(2年生の代表は遼辺涼子さんです)

④ 教員補助事業 運動会開催補助 石巻支援学校・荒浜小学校(5月25日・土)

創立30周年記念・石巻支援学校と仙台市立荒浜小学校の運動会開催補助のボランティアを派遣しました。朝の準備、終わってからの後片付け、そして演技中の運営と頑張ってくれた学生に先生方や地域の方々から、あたたかい感謝のこぼれをたくさんいただきました。



教育復興支援センターだより

④ 第6回拡大復興カフェ in Miyakyo (6月26日・水)

「震災を忘れないために～学生からのメッセージ」をテーマに1年生の赤間仁美さん、首藤大知さん、2年生の渡辺太志さんに、震災当時の体験や、これからの活動に対する思い、宮教大生へのメッセージなどをお話しいたしました。司会は、第4回復興カフェ発表者の菊田真由さんでした。今回は、教務会、大集会所で開催したため、昼食持参で聞いている学生が多く、カフェらしいリラックスした雰囲気の中、行われました。



⑤ 第2回ボランティア新聞を作ろう講習会 (6月26日・水)



5月29日に続き、第2回目のボランティア新聞を作ろう講習会を開催しました。
※学生がつくるボランティア新聞の完成が楽しみです。



学生たちが、手作りケーキでセンター誕生を祝ってくれました。

⑥ 竣工式&竣工記念オープニングシンポジウム (6月29日・土)

本センター棟竣工を記念して、竣工式とシンポジウムを開催しました。竣工式では、学長挨拶、来賓祝辞、センター棟の概要説明の後に、学習支援ボランティア協力員による決意表明がありました。午後のシンポジウムでは、本センターのこれまでの活動内容を振り返るとともに、パネリストカクシオンを通して、地域に根ざした視点での息の長い支援のシステム作り、震災を加えて生きる、地方からものを考える・考え続けるなど、時間をオーバーして復興支援を議論しました。



ボランティア協力員による決意表明

岩沼市立玉浦小学校でのボランティア活動報告など

パネリストたち

教育復興支援センターだより

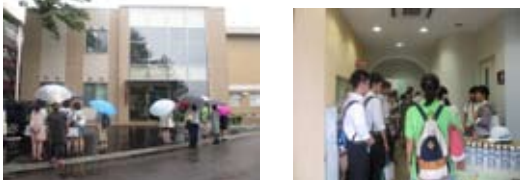
⑩ 学習支援ボランティア夏休み活動 壮行会 (7月31日・水)

学生提案の夏休みの学習支援ボランティア活動・壮行会が開かれました。学生たちはお昼休みから5時まで三々五々集まり、はじめてボランティア活動に参加する学生たちもまぎらわしく、ボランティア活動に対する抱負や、活動内容紹介などが行われました。夏休み明けには、学習支援ボランティア活動報告会も予定されています。



⑪ オープンキャンパス (8月1日・木)

本学のオープンキャンパスで、教育復興支援センターへも大勢の見学者が訪れました。学生たちが集まるミーティングルームで、ボランティア活動を実践している先輩たちの話を聞いていく生徒もいました。高校生を募集しましたので、センター様へ掲示しています。どうぞご覧ください。



平成25年度夏休み学習支援ボランティア活動予定

学年	活動内容	実施日時	実施場所
1年生	学習支援	8月1日(木) 10:00-12:00	センター棟
2年生	学習支援	8月1日(木) 13:00-15:00	センター棟
3年生	学習支援	8月1日(木) 16:00-18:00	センター棟
4年生	学習支援	8月1日(木) 19:00-21:00	センター棟
5年生	学習支援	8月1日(木) 10:00-12:00	センター棟
6年生	学習支援	8月1日(木) 13:00-15:00	センター棟
7年生	学習支援	8月1日(木) 16:00-18:00	センター棟
8年生	学習支援	8月1日(木) 19:00-21:00	センター棟
9年生	学習支援	8月1日(木) 10:00-12:00	センター棟
10年生	学習支援	8月1日(木) 13:00-15:00	センター棟
11年生	学習支援	8月1日(木) 16:00-18:00	センター棟
12年生	学習支援	8月1日(木) 19:00-21:00	センター棟

教育復興支援センターだより

⑦ 「鹿妻復興マップづくり」プログラムに協力しました。(6月26日・水、7月10日・水)

東北大学災害科学国際研究所や山形大学の防災教育研究者が実施している「鹿妻復興マップづくり」に、本学学生がボランティアで参加しました。石巻市立鹿妻小学校4年生の「総合的な学習の時間」で実施する「鹿妻復興マップづくり」プログラムで、東日本大震災で被害のあった地域の変化を前向きに受け止めていくための活動へのサポートでした。



山形大学・村山教授による事前指導



さあ、児童たちと出発(東北福祉大や早稲田の学生も)

⑧ 学習支援ボランティア研修会 壮行式・不安解消会 (7月17日・水)

本センターとボランティア協力員主催の総括研修会を開催しました。約50人が出席し、中井センター長の挨拶、ボランティア活動に参加した学生や、高校時代にボランティアの影響を受けた学生の話の後、質疑応答が行われました。



⑨ 東松島市教員研修会開催 (7月29日・月)

本センターと東松島市教育委員会共催の教員研修会を開催しました。筑波大学教授藤田晃之氏を講師にお迎えし、247名の受講者の前で「学校における法教育の在り方について」と題した講演後、「東松島市の志教育で何を育てるのか」について、質疑応答が行われました。



教育復興支援センターだより



15号
13.9.2

教育復興支援センターだより

夏期休業中 学習支援ボランティア =後期編

【学習支援ボランティア状況】

☆ 東原市1中学校	8月18日～8月20日	宮城教育大	
☆ 東原市教育委員会	8月19日～8月21日	宮城教育大	
☆ 仙台市立藩町中学校	8月19日～8月21日	宮城教育大	東北学院大
☆ 石巻市北上小学校	8月19日～8月21日	宮城教育大	東北学院大
☆ 南三陸戸倉小学校	8月19日～8月22日	宮城教育大	東北学院大
☆ 宮城県黒川高等学校	8月19日～8月22日	宮城教育大	
☆ 大郷町立大郷中学校	8月19日～8月23日	宮城教育大	
☆ 南三陸町志津川中学校	8月19日～8月23日	宮城教育大	上越教育大
☆ 女川町立女川中学校	8月19日～8月23日	宮城教育大	福岡教育大
☆ 色麻町立色麻中学校	8月19日～8月23日	宮城教育大	京都教育大
☆ 塩竈市立4中学校	8月19日～8月23日	宮城教育大	東京学芸大
☆ 岩沼市中央公民館	8月20日～8月22日	宮城教育大	
☆ 岩沼市立玉浦小学校	8月20日～8月22日	宮城教育大	
☆ 丸森町立5小学校	9月24日～9月27日	宮城教育大	奈良教育大



緊張しながらも、しっかりと教員補助
=丸森町立大張小学校=



畳の上で、寺子屋風に
=くりはら塾=



しっかり教材研究をして、生徒たちの前に
=東原市立築館中学校=



ほのぼのとした雰囲気の中で
=色麻町立色麻小学校=

夏期休業中 学習支援ボランティア =前期編

【学習支援ボランティア状況】

☆ 女川町立女川小学校	7月22日～7月26日	宮城教育大	東北大
☆ 柴田町内4小中学校	7月22日～8月23日	宮城教育大	
☆ 仙台市立七郷中学校	7月25日～8月8日	宮城教育大	
☆ 大河原町立大河原中学校	7月25日～8月20日	宮城教育大	
☆ 亘理町立達・荒浜中学校	7月30日～8月5日	宮城教育大	群馬大
☆ 角田市立3小中学校	8月5日～8月9日	宮城教育大	
☆ 大崎市立4小中学校	8月5日～8月9日	宮城教育大	
☆ 気仙沼市立8中学校	8月5日～8月9日	宮城教育大	早稲田大
☆ 色麻町立色麻小学校	8月5日～8月9日	宮城教育大	
☆ 大和町立大和・宮床中学校	8月5日～8月9日	宮城教育大	
☆ 登米市南方公民館	8月5日～8月9日	宮城教育大	京都教育大
☆ 丸森町立丸森中学校	8月5日～8月9日	宮城教育大	奈良教育大
☆ 名取市立関上中学校	8月5日～8月9日	宮城教育大	北海道教育大
☆ 登米市立4小中学校	8月5日～8月9日	大阪教育大	早稲田大
☆ 仙台市立藩町中学校	8月6日～8月9日	宮城教育大	
☆ 一関市立萩荘中学校	8月7日～8月9日	宮城教育大	
☆ 美里町立小田中学校	8月7日～8月11日	宮城教育大	
☆ 美里町立不動堂中学校	8月8日～8月12日	宮城教育大	
☆ 明成高校	8月10日～8月12日	宮城教育大	



明日に備えて、しっかりと1日を振り返って
=気仙沼市の宿泊施設=



毎朝、カモメに送られ大島へ



真剣な学習姿勢には、真剣な見取りで
=名取市立関上中学校=



どんなに暑くても、笑顔で対応
=大崎市長岡地区公民館=

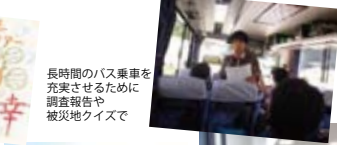
教育復興支援センターだより

④ 学生主催の被災地視察研修～気仙沼地域～ (10月14日・月初)

第12回目の被災地視察研修は、気仙沼出身の本学学生企画・運営によるもので、ポスター、パンフレット、旗、横断幕など全て手作りだった。新校舎建築後一度も入ることなく震災があった気仙沼向洋高校は、未だに瓦礫や車が残ったままだった。(参加者33名)



手作りポスターなどで参加者募集



長時間のバス乗車を充実させるために調査報告や被災地クイズで



気仙沼出身の学生からの説明
～ホテルの屋上～



震災当時の市民動きの話を聞く
～気仙沼事務所内で職員から～

⑤ 大学祭企画 ボランティア報告会・10/26(土)&フォーラム・10/27(日)

ボランティア報告会は、【宮教が考える震災復興～学生ボランティアの復興支援～】とし、学内で特色ある取組をしている気仙沼ボランティア、くりはら塾、若松会、異文化交流部、梨の花プロジェクト、女川町ボランティアなど9団体が活動報告を行った。フォーラムでは、学校現場の先生4名をお招きし、【震災時の学校現場と新しい防災教育】についてご講演いただいた。講演の中で、災害時の情報収集の大切さや教員の役割、緊急時の備蓄やところのケア、主体的な防災訓練や体験を伴う防災活動等の実践例と、学生ボランティア活動の重要性が強調された。



⑥ 第8回復興カフェ in Miyako (10月31日・木)

「台風26号による伊豆大島における災害と支援」と題し、本センター研究開発部門の教員が実施した、台風26号による、伊豆大島の被害調査について、速報し、今後の支援や復興の在り方について議論した。



教育復興支援センターだより



16号
13.10.1

教育復興支援センターだより

① 岩沼市教育委員会との地域連携・被災地研修講演会 (8月20日・火)

東日本大震災から2年6ヶ月を迎えた今、震災で甚大な被害を受けた岩沼市玉浦地区にある玉浦小学校、玉浦中学校の震災復興に向けた取り組みを中心に、岩沼市教育委員会学校教育課 山川課長にお話しいただいた。岩沼地域の学習支援ボランティア活動を牽引している本学学生や、北海道教育大生は、課題を乗り越え未来に向かって進んでいる岩沼市の現状を熱心に話した。この地域連携「被災地研修講演会」は山崎事務所を活用し、本センターとTV会議システムにて中継した。



② 第7回復興カフェ開催 (9月19日・木)

ポトランド州立大学・スティブン・リード・ジョンソン博士による「持続し復元力ある地域をつくるコミュニティの物語」と題した、第7回復興カフェを開催した。今回は附属図書館と共催という初の試みであった。東日本大震災後のコミュニティの復旧・復興を考えると「ポトランドストーリー」という、行政への強力な市民参加、街づくりの全米モデルの手法があることなどをお話しいただいた。



③ 二心の復興＝沖縄県立芸術大学との連携～大学間連携共同教育推進事業から～

9月25日(水)から29日(日)において、沖縄県立芸術大学の被災地交流として「彫刻展」や「琉球芸能公演」、「空手スポーツ教室」が開催された。その交流の一環として参加学生の被災地研修、津波被災した茨城県の子供を招いた「シーサーづくり」のワークショップが行われた。



＝やがて撤去される南三陸防災庁舎の前で＝



＝もう津波が来ないようにと
＝魔除けのシーサーづくり＝

教育復興支援センターだより



17号
13.11.11

教育復興支援センターだより 18号 '14. 1.31

教育復興支援センターだより

④ 学生企画第2弾 南相馬被災地視察開催 (12月7日・土)

南相馬出身の本学学生2名がガイド役を務める南相馬被災地視察を実施した。...



小高駅前に置かれた被災後の自転車

⑤ 南東北3大学連携シンポジウム (12月8日・日)

山形大学・結城華夫学長の基調講演「ソフトパワー大國をめざして～東北からの発信の可能性～」やパネルディスカッション...



⑥ 石巻市立鹿島小学校復興マップ発表会 (12月11日・水)

本年、6月・7月に東北大学災害国際研究所・佐藤健研究室主催の、石巻市立鹿島小学校での「復興マップづくり」...



ボランティア学生へ出した手作りの招帖状



教育復興支援センターだより

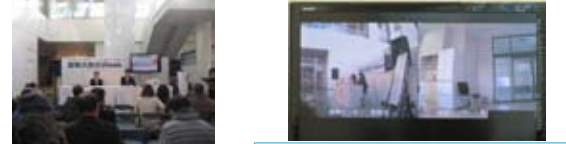
⑩ 教育復興支援ボランティア協力員第2回総会 (1月15日・水)

本学学生の教育復興支援ボランティアに対する興味・関心を高めることを目的に立ち上げた、教育復興支援ボランティア協力員の第2回総会が開催された。



⑪ AERFで学ぼう 宮教大防災Week (1月21日・火～25日・土)

本学が受託した【学びを通じた被災地の地域コミュニティ再生支援事業】の一環である、標記防災連続講座に特任教員たちが講師として協力した。



オープニング

センター事務室TV エール会場(仮)・気仙沼プランチ(仮)



Date fm 「Hope for MIYAGI」の公開収録



クロージング

学びを通じた被災地の地域コミュニティ再生支援事業HPはこちらです。 http://manabimiyako-u.ac.jp/

教育復興支援センターだより

⑫ お茶の水女子大・附属校との連携事業 (山台近郊被災地視察・学生企画第3弾 気仙沼被災地視察研修 (12月14日・土～15日・日))

お茶の水女子大・水野勲教授の被災地視察調査に、お茶大附属高校ボランティア部関係者が同行した。



気仙沼プラザホテル屋上にて

⑬ 非常用発電機の定期運転 (12月18日・水)

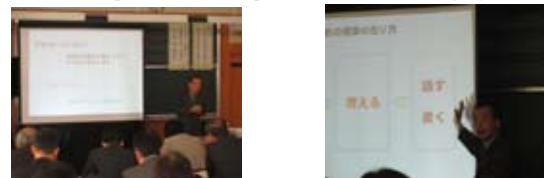
当センターに設置された非常用発電機には、設置の機能保全のため毎月1回10分間の定期運転が義務づけられているので、定期運転を実施した。



センター1階正面玄関に設置

⑭ 大塚町教員研修会 (12月24日・火)

大塚町教育委員会主催、本センター共催で教員研修会を開催した。テーマは「東日本大震災の影響が懸念される児童・生徒を考慮した授業づくり」と題し、吉田弘特任教授が★学校生活での授業時間の占める割合を基に、授業を通じた教育経営の在り方★思考力・判断力を高めるために表現力を重視した授業経営の在り方★授業を軸にした、児童生徒の学ぶ意欲の向上、教職員の指導意欲の向上のための学校運営の在り方を講話した。



発刊にあたって

東日本大震災から早くも3年が経過し、この「あすへ向けての軌跡」も3冊目となりました。

震災で亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された方々へ改めてお見舞い申し上げます。

昨年12月に学生企画による被災地視察〈南相馬ツアー〉が開催されました。視察した同市小高区は福島第一原発から20km圏内にあり、家屋等が放置されたままです。当日、取材した福島民報は「時が止まったままの被災地を歩く学生ら」と写真の説明をしています。

私は参加できませんでしたが、いみじくも南相馬市出身の学生がインタビューに答えた「知ってもらうには言葉では足りないと思った。この場所で実際に感じてほしいと思った。」との発言に尽きると考えます。できれば、すべての本学の学生に被災地を訪れ、自分の目で見、現地の方から話を聞き、多くのことに感じ、さまざまな点について考え、行動に移してほしいと願っています。

さて、教育復興支援センターの平成25年度の活動を振り返りますと、次の3点に思い至ります。

第1は、防災・復興などの新たな教育の創造を担当する研究開発部門の充実です。センター開設にあたって研究開発部門は、支援実践部門と車の両輪となって、教育復興の使命を果たすとしていました。それが今年度4月に、研究職教員2名の配置が実現でき、センターの業務に厚みが生まれ、将来構想への布石ともなっています。

第2に、センター棟の竣工です。組織がスタートしてほぼ2年、待望久しい独立したセンター棟が完成しました。研究室、事務室、会議室に加え、ミーティングルームを設けました。学生が昼休み、放課後に訪れ、大学祭や学生企画の検討、各ボランティア団体相互の情報交換などが活発に行われています。その成果の一つが、前述の被災地視察研修です。

第3に、学生「ボランティア協力員」の組織の確立と活動の充実です。協力員とはセンターと本学学生とを仲立ちする存在であり、24年4月入学生から各コース、専攻ごとに選出しています。今年度は、1、2年の代表者、運営委員の協議により、不安解消会、視察報告会、ボランティア報告会、大学祭などの9チームが編成されました。さらに、係ごとに原案の検討が行われ、それに基づいて各種行事が企画運営されました。そうした学生の主体性が、長期休業中の学習支援等のボランティア活動に好影響を与え、前年度を上回る充実した支援活動が展開されました。また、学習支援等のボランティア活動に参加し、さまざまな局面を経験することで、人間的な成長が促されることが実証されています。

本センターの主な使命は、被災地の教育の質的改善、児童生徒の学力向上、心の復興等に貢献することです。そして、その主たる担い手は学生であると思っています。学生一人一人がそのことを理解し、協力員等を通じて全学に情報が行きわたり、学習支援等の具体的行動となって被災地支援に及ぶことを願っています。

この一年間、多くの方々にお世話になりました。特に、何よりも被災地の困難さに思いを馳せ、学習ボランティアに参加してくれた本学、他大学の学生諸君に感謝します。

「軌跡」は本学、本センターの歩みをまとめたものです。別に編集する研究「紀要」とともにご参照願えれば幸いです。

震災からの一刻も早い復興を祈念し、発刊にあたってのごあいさつといたします。

教育復興支援センター長
中井 滋

東日本大震災

踏み出そう! 子どもたちの笑顔のために

あすへ向けての軌跡

震災から3年を経て

平成26年3月31日発行

編集・発行 / 国立大学法人
宮城教育大学 教育復興支援センター

〒980-0845 仙台市青葉区荒巻字青葉149

電話 022-214-3296 022-214-3667

E-mail fukkou@adm.miyakyo-u.ac.jp

制作・印刷 / 株式会社ホクトコーポレーション

ご支援いただきました皆様
協働いただきました皆様
ありがとうございました

地域とともに 子どもたちの笑顔のために
これからは 本当の復興です

東日本大震災

踏み出そう! 子どもたちの笑顔のために

あすへ向けての軌跡 ～震災から3年を経て～

発行



国立大学法人
宮城教育大学

教育復興支援センター

〒980-0845 仙台市青葉区荒巻字青葉149

TEL 022-214-3296

E-Mail : fukkou@adm.miyakyo-u.ac.jp

